

日本生物学会誌

第 32 号



日本生物学会

1993年 6月10日

第 32 号

も く じ

奥野良之助：現実主義者のある日の幻想（２） カンボジア・自衛隊・海外派遣・国連・PKO そして平和憲法	・ ・ ・ ・ ・ 1 2 2 5
奥野良之助：『犬死に』考	・ ・ ・ ・ ・ 1 2 4 6
金沢大学平和問題ネットワークの果敢なる戦い（その３）	・ ・ ・ ・ ・ 1 2 5 2
編集局だより	・ ・ ・ ・ ・ 1 2 6 2
会計報告 1992年度	

現実主義者のある日の幻想 (2)

カンボジア・自衛隊・海外派遣・国連・PKOそして平和憲法

奥野良之助

(1)

最近私は、毎日いらいらしながら暮らしている。少々神経症の気味である。

その理由のひとつは、ここ数年ひいたことのない風邪をひいたためである。学生が風邪をひいたときには、「精神がたるんでるからや」と常に言っていた私がひいてしまったのだから、やはり精神がたるんでいたにちがいない。なぜ精神がたるんだか。考えられる原因はただひとつしかなかった。それは、常日頃、あまりにも正しい言動で私に圧力をかけ続けている、かのF女史が、研究と称して、いや、ほんとうに研究のために、青森県は浅虫温泉、の近くの、東北大学浅虫臨海実験所へでかけた直後に、私は風邪をひいたのである。以来ずっと調子が悪い。そのうちF女史が帰ってきたら直るにちがいない。(確かに直った)

もうひとつは、ワープロの叩き過ぎで、頸腕症候群にかかって、右肩から右首筋にかけて突っ張っているためである。ちょうど、ひどい寝違いをしたようなもので、首が右のほうへは回らない。左へはよく曲がる。かつて、タイピストの職業病としてさわがれたことがあるが、この期におよんで、こんなものにかかるとは思わなかった。

昨年暮れには、やはりワープロのせいで、右手の指2本が腱鞘炎になったこともある。ちょうど正月に、医者をやっている甥に会ったので、すぐに直せと言ったら、そんなもん、休めておけば直る、と診察を拒否された。まあ、彼は胸部外科医で、手遅れの肺ガン患者を無事あの世に送り届ける手術ばかりをやっている医者だからまあそんなものだろう。

医者が頼りにならないとすれば、自分で治す以外に道はない。といて、休めて直すのではあたりまえだから、おもしろくもなんともない。そこで、使いつづけながら直すことにした。腱鞘炎はそれでなんとか直したのだが、今度は頸に来てしまった。これもまた、使いつづけながら直すべく、こうして無理をしてワープロを叩いているというわけである。(これは、しつこく直らないね)

もともと私は、なにか機械を買うと、それが壊れるまで使わないと気がすまない。和文タイプは、ついに2台叩きつぶした。いま、可哀そうなトヨタのターセルとホンダのスーパーカブが悲鳴を上げている。リコーの印刷機はカウンターの歯車がすりきれて回らなくなり、印刷するとき「1枚、2枚、3枚・・・」と数え続けなければならない。千枚も印刷しようと思ったら大変だよ。ワープロも叩きつぶしてや

ろうとしたのだが、こちらが先につぶされてしまった。でも、そのうち潰してやろうと思っている。

だいたい人間は、腱鞘炎であろうが、頸腕症候群であろうが、自力で直すことができる。機械は自分で直せない。最後の勝利は我が手にある。もっとも、人間には寿命というものもあって、こうなると自力では直らない。まあ、他力でも直らないが。

ところで、なぜ私が、腱鞘炎や頸腕症候群になるほどワープロを叩いているかといえば、本誌前号で紹介した、金沢大学平和問題『ネットワーク・ニュース』を作りすぎたからである。集会を開いて、ネットワークの今後の運動のやりかたを検討したとき、経済学部のある先生が、「ニュースをもっとたくさん、週刊くらいで出したらどうやろ」と提案された。何でも真に受けるのが私の悪い癖で、それならばと、8ページ建てのニュースを、毎週火曜日発行でつづけ、今日も30号を印刷・製本した。各学部の配布係が悲鳴を上げているらしいが、そんなことは印刷局長の私の知ったことではない。私が頸腕症候群にかかったと言ったら、ネットワークのメンバーはみんな、うれしそうにニコリするのだが、おそらくそれは、ぬか喜びとなるであろう。(その後しばらくして、「ネットワーク・ニュース」は、週刊どころか、2か月も休刊となった。頸腕症候群の悪化ではない。春休みが始まったからである)

(2)

もっとも、私が神経症になったのは、本当は風邪引きや頸腕症候群のためではない。自衛隊がカンボジアまで出かけていき、国内では憲法改悪の大合唱が始まったからである。そればかりではない。それに対して、自衛隊を呼び返そうという声も、憲法を守れという声も、ほとんど出てこないからである。大学教官は国家公務員であり、国家公務員というものは、就職のとき、日本国憲法を守るという「誓約書」にハンコを押すことになっている。その日本国憲法が危機に瀕しているというのに、ほとんどだれも守ろうとしないのである。これは、国家公務員の義務違反だと思うのだがどうだろうか。

今日、物理学のある教授が学会本部、つまり私の部屋へやってきたので、かくかくしかじか、日本国憲法を守るために頸腕症候群になったと言ったら、それは届けたほうがいい、業務障害に認定されて、たくさんもうかるぞ、と教えてくれた。まあ、それを信じるほど、私も教官歴は浅くない。

ちなみに言うと、この物理学の教官は、私と同年、つまり昭和6年生まれ今年の61歳。当然相当ひねくれていて、ほとんどまともなことは言わない人だが、それがたまたまのか、私同様、長らく助教授で留め置かれて来ていた。二人そろって50歳になったとき、人生50年というから、われわれはすでに人生を終えた、こ

れからは余生だ、と意見が一致して、『余生会』を結成することにした。「ところで、『余生会』で何するんや」「あっちこっち行って、『そんなこと、よせいや』と言って回るといのはどうかね」「そら、ええな」ところが、彼は私を裏切って、最近教授に昇格した。世の中には神も仏もあるようで、たちまち天罰が当たって、彼は健康診断で肺ガンを発見され、片肺の半分を切り取られてしまった。まあ、私も胃袋の三分の二を切り取られているが、お互い『余生』だからこそ、もうしばらく楽しもうと話し合っている。

話をもどすが、PKOや憲法の話をして、学生の反応は、きわめてにぶい。話して聞かせると、一応なるほどというのだが、それから何をするかというと、車に乗って遊びにいってしまう。まあ、こちらもこの非常時に、毎晩往復50キロ走って、200円で入れてくれる温泉へはいりにいっているのだから、非難するつもりはない。もっとも、よく考えてみれば、今の学生に、こんなことに敏感になれというほうが無理な話であることがわかる。彼らは1970年代の生まれ、日本が高度成長に浮かれ出したころから生活を始めている。途中、石油ショックの不景気はあったが、せいぜいトイレットペーパーの買い占めが話題になった程度で、大したことはなかった。そして、今や、世界中のドルを集め、1年に1千億ドルという、世界唯一の黒字国である。パブルがはじけたといっても、たかが内定取り消しが2、300人出たくらいで、学生の意識はちっとも変わっていない。

問題なのは、わずかなりとも戦争の経験があり、戦後、アメリカ帝国主義に対して果敢なる闘争をしながら成長した、少し年寄りの先生方が、一向に動こうとされないことである。このことを、私が尊敬している、金沢大学唯一の「学者」、経済学部のY先生に話したら、先生は、自分のことを言われたと誤解されたいらしい。《「正解」じゃないんですか：編集局》「最近の支配者は、金や汚職や、汚いことをかくさなくなった。昔の権力者は、それなりの『権力の美学』を持っていた。だから、反対運動も盛り上がりがないんだ」と言われた。私はびっくりして、『権力の美学』など持っている権力者より、今みたいな金の亡者が権力持っているほうが、僕は好きだ、と言ってしまって、怒られた。

もう少しくわしく聞けばよかったのだが、早々に怒らせてしまったので、その『権力の美学』なるものがどんなものか、よくわからない。もともと自然科学者は、こういった「観念」には弱いのである。自然科学者は、具体的なことしかわからない。そこで、目先の利益に目がくらんで、こんな角間の山奥までつれてこられてしまったのだが、「観念」を豊富に持っておられる教養部は、引越しに最後まで反対された。かくのごとく「観念」なるものは大切なものである。それは、「理想」といいかえることもできるのである。

もっとも、その先生のおられる経済学部は、法学部・文学部とともに、なんと理学部より2年も前に、角間の山奥へきておられる。それは、もともと法文学部として一つだったものを、三つの学部に分離改組するために、狭い金沢城内を出なければ

ばならなかったからである。おかげで、教授や助教授のポストが大幅に増え、助手は助教授に、助教授は教授に昇格した。これは観念の世界ではなく、現実の世界である。人は、観念、つまり理想のみでは食べていけない。

といって、理学部のように、現実だけが大手をふって横行しているところは、あまりにも殺伐としてくる。テントウムシが何匹生まれ、何匹死んで、何年目に全滅する、といったことは、まあ研究するなどは言わないが、本来どうでもよいことで、わかったからといって威張ることではあるまい。そこで私は、角間新理学部2階の223号室で、ソファにすわり、コーヒーを飲み、日夜、いや夜は温泉に行かないといけなから、日だけ、さまざまな「観念」について、考察にふけているというわけである。

その私にも、『権力の美学』という観念は、よくわからなかった。そういうときは、自然科学者本来の、具体的・現実的な考え方にもどればよい。古今東西の権力者を具体的にあげて、具体的に「美学」を持っていたかどうか、検討すればよいのである。

まず、戦後の日本の宰相から始めよう。

宇野宗祐という首相がいた。彼の愛人はたしかに「美」しい。でも、好きな女が美しいというだけで、「美学」の所有者とは言えないだろう。佐藤栄作首相は、団十郎ばりと呼ばれた、大きな顔と目を持ち、戦後歴代首相の中でいちばん美男子だったが、それも「美学」の対象になるとは思えない。まあ、顔は美学とは無縁だが、美学らしいものを持っていたということ、やはり吉田茂ただ一人か。私が学生のころ、この吉田茂がずっと首相をやっている、いわばけんか相手だったから、情が移っているのかも知れない。

太平洋戦争を始めたときの首相は、陸軍大将東条英機である。彼は、南や北の島々で兵隊さんが玉砕しているときに、街でゴミ箱をのぞいて歩いた。庶民の暮らしぶりを直接たしかめるためである。あのころは、食うものもなくなってきたから、これではだめだと、早々に降伏してくれたら、それこそ『権力の美学』所有者第一号に認定してもいいのだが、彼はゴミ箱をのぞいただけで勝算のない戦争をつづけたから、やはり落第である。

学者は、広く世界を見渡さなければならぬ。外国の権力者をちょっと当たってみよう。

ヒトラーはどうか。彼が演出したベルリンオリンピックはたしかに美しかった。子供のころに、うっとりとその映画を見た記憶がある。だが、彼の顔もやったことも、美学とは縁がない。醜学である。

ナポレオンという、最大級の権力者がいた。同じく美しいジョセフィーヌを愛したが、宇野宗祐とはくらべものにならない大物である。感じとしては、ヒトラーよりナポレオンのほうが、権力の美学に近い気がする。

もっとさかのぼると、ギリシャの英雄、アレキサンダー大王がいる。私の好みか

らすれば、権力の美学といえはまず第一に思い浮かべる権力者である。もっとも、それほど確たる理由があつたのではない。彼は美男子であり、若くして死んだ、つまり老醜をさらさなかつた、という程度である。

まあ、私の考えるところでは、美学を持った権力者というのは、自分個人の利益よりも、なにか「理想」を持っていて、それを追い求める人ではないかということである。吉田茂は、政治でも経済でも、あるいは軍備でも、アメリカ占領軍にいちおう抵抗していた。そして、金丸のように、個人の蓄財に走ったりはしなかつた。もともと結構金持ちだったのだが。

ナポレオンもアレキサンダー大王も、少なくとも若いころは、それぞれ理想を持ってそれに邁進した。ナポレオンは長生きしすぎたために、理想が変質してきたのだが、アレキサンダーは若くして死んだから、馬脚をあらわさずにすんだとも言えるのかも知れない。

ただし、理想を持った権力者というものは、ほとんど必然的に多数の人間を殺す。敵ももちろんだが、自分の部下も数知れず犠牲にする。その犠牲を美化するのが、「権力者の美学」なのかも知れない。そうなると、権力者はナポレオンよりも宇野宗佑のほうが良いということになる。

(3)

人間若いころにはだれでも、何か理想を持つ。このごろの学生を見ていると、そうでもないようだが、まあ、彼らも何か理想を持っていると思つておこう。

この間テレビを見ていたら、石原慎太郎という人が出てきて、「人間の最高の美德は、自分を犠牲にして他人を助けることだ」と言っていた。最近の学説では、人間の持っている遺伝子は「利己的遺伝子」であつて、人間いかにあがいても、「利他的」には行動できないのだ、ということになっている。その遺伝子に逆らつて他人のために自分を犠牲にしようというのだから、やはり立派なことである。わがF女史は子供のときに、「他人の嫌がることを進んでしよう」と教えられ、60歳近くなつた現在でも実行している。ただし、「他人」というのを「教授・助教授」に置き換えて実行するので、私まで迷惑をこうむっている。

カンボジアの人たちが苦しんでいる。国連が、カンボジア再建のシナリオを描いた。その基礎は、民主的総選挙である。でも、カンボジア人はこれまで、西欧風の民主的選挙などやつたことはない。まず、選挙の意義ややり方を教えなければならぬ。

こうして、中田厚仁君は、国連ボランティアとしてカンボジアへ行き、当のカンボジア人に射殺されてしまった。生前の中田君の映像をテレビで見たが、目が異様にきらきらと輝いていた。理想を持つ人の示す、ひとつの特徴である。

息子を殺された父親の武仁氏が、息子の理想を継ぐのだと言つて、永年勤めてき

た大手商社を辞め、国連ボランティアになるそうである。厚仁君の気持はまだ分からぬでもないが、親父さんのほうは気味が悪い。息子の意思を継いで、世界の恵まれぬ人のために尽くすのだとおっしゃるけれども、その前に、これまでの30数年、大手商社の社員として、恵まれぬ人の住む国々と、どのような取り引きをされてこられたのか、それをまずおききしてみたい。

父親の理想を息子が継ぐという話は聞かないでもない。私の息子は高校のとき、先生から、お前はどこの大学へ行きたいのか、と聞かれ、金沢大学でなくて生物学科でなければどこでもいい、と答えたらしい。要するに、父親、つまり私、の匂いのしないところへ行くことだけが「理想」だったようである。もっとも、そうして選んだ大学に、学位論文発表会にたまたま出席して、質問攻めにしていじめた後輩が先生でいて、息子は仇をとられたらしい。天網恢恢（てんもうかいかい）疎にして洩らさず、とはこのことか。このごろは政治の世界にも二世議員が大流行りだが、だいたい親父を尊敬して後を継ぎたいというような奴にろくなのはいない。まともに親父を乗り越えていないのだから、必然的に親父より小粒となる。もっとも、親父の匂いのしないところへ逃げていっても、大成するとは限らない。

さっき触れた、テレビに出てきた石原慎太郎という人は、この自分を捨ててカンボジア人に尽くした厚人君と、その理想を受け継ぐ武仁氏を、これからの日本人の理想としなければならぬ、と説いていた。

でも、ちょっと待ってほしい。人間にとっていちばん大事なことは、理想に燃えることではなくて、理想の「中味」をちゃんと吟味しているかどうかだと、私は思う。

私も中学2年生まで「理想」を持っていた。アジアの人達は、欧米白人帝国主義にしいたげられている。フィリピンはアメリカ人に、東インド諸島はオランダ人に、インドシナ半島はフランス人に、香港・シンガポール・マレー半島・インドはイギリス人に、植民地にされ、収奪されている。そして、広大な中国も、これらの白人帝国に今や分割されようとしている。日露戦争で、アジア人として初めて白人を撃破したアジアの盟主、大日本帝国がいまや立ち上がらなければならない。アジアの地から白人を追い出し、アジア人のアジアをつくる。それが、「大東亜共栄圏」である。

なかなか説得力のある話ではないか。私たちはこの話を信じ、竹槍と火はたきでB29というアメリカの戦略爆撃機に対抗した。竹槍というのは、昔の百姓一揆でよく使われた、竹を斜めにスパッと切って、槍にしたものである。つくったことはつくったが、敵ははるか上空を飛んでるだけでおりにこないから、試すわけにいかなかった。したがって、どれくらい効果のあるものかは知らない。火はたきというのは、掃除に使うほこりはたき、といっても、今の若者は見たことがないだろうが、竹の棒の先に細く切った布ぎれを数本縛りつけたもので、これで、箆箭の上やら障子の棧（さん）やらをバタバタとはたいてほこりを落とす、その「ほこりはたき」

の大きなものが火はたきである。2メートルくらいの長い竹竿の先に、藁縄を数本ゆわえつけてつくる。これで、何をするかというと、焼夷弾がまき散らした火をはたいて消すのである。

当時、B29が落とした焼夷弾には2種類あった。一つは六角形、八角形だったかな、の棒状のもので、マグネシウムなにか知らないけど、とにかく花火のようにシュウシュウと音を立てて火花を散らし、高熱を発して燃える。これには火はたきは効かない。竹と藁縄では燃えてしまうだけである。もう一つは油脂焼夷弾といって、どろどろの油脂が飛び散り、壁や天井にくっついて燃え上がる奴である。これが落ちてきたら、火はたきではたいて消せと指導されていた。

敗戦直前、広島に原爆が落ちた8月6日の前の晩、甲子園球場のすぐ裏にあった私の家も、ついに空爆にあった。その年の春頃から、大阪と神戸が毎夜空襲され、甲子園はちょうどその真中だから、屋根に上がって「やあ、燃えてる、燃えてる」と、毎晩火事見物をしていたのだが、その夜はちょっと様子が違い、機を見るに敏な父親が「そら、逃げろ」と、焼夷弾の落ちてくる前に甲子園球場へ逃げ込んでしまった。それで、ふだんから訓練にいそしんでいた私も、火はたきを使うチャンスを失ってしまったのである。だから、これもどれくらい効力のあるものか知らない。

もっとも、朝になって焼け跡へ行ってみたら、広くもない私の家の敷地に、油脂焼夷弾が20数発落ちていた。だいたい、一本の焼夷弾に2、3人がかりで火はたきを使うと消せるという勘定だったから、私の家だけで五〇～六〇人くらい必要だったわけである。逃げてよかった。

それはともかく、戦争末期になると、私のいた大阪もほとんど戦場といってもよかった。B29が編隊を組んで、高度8000メートルくらいを飛行機雲を引きながら飛んでくる。これが不思議なことに、なんともいえずきれいなのである。そして、あまり怖くはない。なぜなら、やってくる方向で、爆弾が当たか当たらないかわかるからである。方向がちょっとでもずれていれば、まず当たらない。まあ、当たるとわかったときはおしまいだ。いちおう大都会では防空施設もつくられていて、高射砲を射つ。これがまた、全然当たらない。第一とどかないのである。ところが、とどかないでもある高度までうち上がると、花火と同じで爆発する。すると、砲弾がばらばらになって、かけらが引力の法則にしたがって落ちてくる。一度、私からほんの5メートルくらいのところへ落ちてきたことがあった。掘り出してみると、直径2センチ、長さ10センチくらいの細長い鉄片で、こんなのにあたったら即死である。味方の撃った弾丸の破片に当たって死んだのでは、死んでも死に切れない。アメリカ軍の爆弾で死ぬのも困るけど。

というわけで、私だって「大東亜共栄圏」という理想に燃えて、カンボジアの国連ボランティアに勝るとも劣らぬ危険な戦場を往来していたのである。助かったのは偶然で、死んでいてもまったくおかしくはなかった。《惜しかったなあ：編集局》そのころの私の目は、キラキラと輝いていたに相違ない。もっとも、子供のころの

写真は、B29にみんな焼かれてしまったから、確かめることはできない。

その私が、悪運強く生き残って戦後聞かされたことは、大東亜共栄圏という「理想」が、まったくのインチキであったということであった。それで、以後私は、理想なき唯物論者として生きることになる。

(4)

大東亜共栄圏なる論理には、たしかに正しいものが含まれている。16世紀以来、ヨーロッパ白人国の、アフリカ・アメリカ・アジア侵略は、ひどいものであった。彼らの論理からすれば未開野蛮である人たちに、「文明」なる恩恵に浴させてやろうと思をきせて植民地にした。「大東亜戦争」は、植民地のアジア人を「解放」するための聖戦だったのである。

ただ、ひとつだけ、隠されていたことがあった。それは、大日本帝国がひそかに、白人に代わって、アジア人の支配者になろうと考えていたことである。それは、朝鮮を併合し、満州帝国をつくり、中国へ攻め入り、南方諸国を武力で支配したことから明らかである。なんのことはない。白人を追い払ってアジア人を解放するといながら、自分が白人に代わって支配者になる。白人諸帝国と同じことを日本がやろうとしただけであった。

今、国連による国際貢献という「理想」が、日本中を横行している。横行だけでなく、縦行もしているようだ。これさえ唱えれば、相当な知識人でも黙ってしまう。いまや、国際貢献ぬきに、政治も社会も語れなくなってしまった。日本が国際貢献しなくてはならぬことは自明のこととして、あとは、何をいかにしてやるかという議論しかない。軍事力を使うか、経済力だけで行くか、それとも第二、第三の中田君を送り出すか。まあ、危険なところへ送り出すのなら、65歳以上の年寄りがい。若い人は日本で大いに働いてもらって、年金の掛金を払ってもらわなければならぬ。年寄りが減れば、年金財政がそれだけ豊になる。

私は、大東亜共栄圏でだまされてから、理想なるものに偏見を持っている。若者の目がキラキラしているだけで、ぞっとする。まあ、中田君の親父にしろ、石原慎太郎氏にしろ、口では理想を説いていても、目は一向にキラキラしてないから、自分の理想に自分が心酔していないことは明らかで、このほうがまだぞっとしない。理屈で議論できるからである。目がキラキラし始めると理屈が効かなくなるから、私のような口舌の徒は困ってしまう。

そこで、この「国連による国際貢献」なるものも、中味を検討しておかねばなるまい。

(5)

戦争前には、「国際連盟」という組織があった。日本が満州国をつくったとき、国際連盟はそれを認めなかった。そこで、日本はついに国際連盟を脱退した。そして、「国際的孤児」となり、太平洋戦争に突入していくことになる。

もともと、その「孤児」には強い味方があった。ヒトラーのドイツと、ムソリーニのイタリアである。ドイツは問題なく強かったが、イタリアのほうは少々強いとは言いがたいところもあった。ドイツがヨーロッパ侵略を始めたころ、ヒトラーのところへ将軍がやってきた。「総統。大変です。イタリアが参戦しました」ヒトラーは少しも騒がず「1個師団持っていけ。イタリアならそれで大丈夫だ」「いえ、違うんです。イタリアがドイツの味方として参戦したんです」ヒトラーは急にあわてだして、「そりゃ大変だ。5個師団持っていけ」

こういうことを書いているから、話が長くなって困る。とにかく、日本はドイツ・イタリアと組み、アメリカ・イギリス・フランス・ソ連・中国と戦った。わが方を枢軸国といい、敵方を連合国という。結末はご承知の通り、連合国の勝利であった。

さて、この勝利した連合国は、国際連盟にかわる国際機関をつくろうとした。そのとき、なぜ国際連盟が第二次世界大戦を防げなかったかを、深刻に反省し、それは、世界の大国の意思が通らなかったからだという結論を出した。新しい国際機関、「国際連合」には、したがって、世界の平和と安全を保障する「安全保障理事会」が設けられたが、その中に、安全保障常任理事国なるものを規定した。常任理事国すべてが一致して、世界の安全を保障するという仕組みにしたのである。逆にいうと、常任理事国の一つが反対すると、どんな議案も通らない。これが、「拒否権」と呼ばれるものである。

この常任理事国に、アメリカ・イギリス・フランス・ソ連・中国の5国がなった。つまり、第二次大戦の「連合国」がそのまま横滑りしたのである。ドイツ・イタリア・日本は、連合国の敵国と規定された。これが「敵国条項」と呼ばれるものである。今でも削除されていないから、有効である。

戦争中から戦後にかけて、連合国は一応「連合」していた。そして、ドイツと日本がぼろぼろになった段階で、それは世界の「大国」を代表するものであった。この5大国が一致して相談、まあ、談合みたいなものだが、すれば、世界の平和が保たれるであろうというわけである。

ところが、そのもくろみは、戦後1～2年で崩れてしまった。西側諸国とソ連が対立し、しかも中国で蒋介石が毛沢東に負けて台湾へ落ちのびてしまったからである。まあ、国連はずいぶん長い間、毛沢東の新中国を認めず、台湾の蒋介石を常任理事国にしておいたのだが、ソ連のほうは追い出すわけにはいかない。ソ連は、西側諸国の持ち出すあらゆる案件に、すべて拒否権を発動する。世界の平和を保証するはずの、5大国による常任理事会は、半身不随に陥ってしまった。

そこで、大国は、といっても主としてアメリカとソ連だが、国連そっちのけで軍備拡張に走る。また、後進小国に武器を援助して、自分達の味方を増やそうとする。

時には、朝鮮戦争やベトナム戦争、あるいはアフガニスタン戦争のように、大国自ら乗りこんで戦争する。いわゆる「冷戦構造」が世界を支配してきたのである。

この間、わが日本は、憲法を無視して自衛隊をつくったりしたが、結構ずるく立ち回って、いつのまにか経済大国になっていたというわけである。

さて、アメリカとソ連の冷戦構造が崩れ、それどころかソ連そのものがなくなって、世界各地でずっと続いてきた民族紛争を抑えきれなくなった。冷戦時代なら、社会主義国にはアメリカが、資本主義国にはソ連が、それぞれ援助して叛乱軍をつくる名目があった。こんど、自衛隊がはるばる出かけていったアフリカのモザンビークは、ポルトガルの植民地から独立して社会主義路線をとったが、はじめはおとなりの旧ローデシア（現ジンバブエ）の白人政権が、のちには南隣の南ア共和国が後押しして右翼ゲリラを組織し、長年内戦が続いていた国である。そんな例は、枚挙にいとまがない。アメリカ海兵隊が深夜ひそかに上陸したら、テレビカメラが待ち受けていて、暗視装置付の海兵隊員がテレビライトに照らされて目がくらんだというソマリアは、ソ連とアメリカが競争で武器を援助した国であり、悪名高き武装集団の使っている武器の大方はアメリカ製である。それを、アメリカ軍が武装解除して武器を取り上げるというのだから、彼らが怒るのも無理はない。あれは、金を払って買い戻さなければならない性質のものである。

そこで、西側は東、東側は西、というこれまでの大義名分の代わりに持ち出してきたのが、国連という「錦の御旗」であった。ソ連は崩壊し、常任理事国の席はロシアが受け継いでいるが、もはや西側諸国の出す提案に、拒否権を発動する力はない。そして、中国もまた、経済発展路線をとり、これまたほとんど拒否権を発動しなくなった。つまり、国連安全保障理事会は、いわば、アメリカを中心とした西側大国の思いのままになってきたのである。国連をつくったときの、連合国の「理想」、わかりやすくいうと「思惑」が、今になって実現してきたことになる。

(6)

世の中には、悪者というのが必要である。悪者がいなければ、良い者が威張れない。私のいる金沢大学理学部に、もう一人、奥野さんという先生が赴任してきた。すると、皮肉しか言わない数学科のT教授が、「これで理学部には、悪い奥野と良い奥野ができたわけやな」と私に言った。「いや、良い奥野と正しい奥野ができたんですよ」ちなみに、新しく来た奥野先生は、正幸という名前である。

悪者が出てきて、悪いことをすれば、良い者、あるいは良いと思っている者は、一致団結して、悪者をやっつけようとする。国を治めることに失敗して、反乱が起きそうになると、となりの国を悪者にして攻撃するというのは、昔から国王のよく使った手である。冷戦時代は、アメリカとソ連が互いに相手を悪者にして、国民を一致団結させた。冷戦が終わると、悪者がいなくなった。それでは困る。

冷戦後の悪者第1号は、言うまでもなく、イラクのフセイン大統領である。まあ、たしかに悪いことは悪いが、もともとフセイン大統領をおだててイランに攻めこませたのはアメリカであって、いわばアメリカが育てた悪者といってよい。

さて、このアメリカ育ちの悪者フセイン大統領は、隣国クウェートに食指をのばし、なんとかいう女性のアメリカ大使にさぐりをいれた。なんとか女史がはっきり言わなかったものだから、アメリカは黙認してくれると誤解して、クウェートに進攻した。このとき、アメリカ大使が毅然と拒否していれば、フセインは進攻しなかっただろう。悪者というのは、賢くなかったら動まらない。良い者なら、何にも考えなくとも生きていける。つまり、アメリカがあまりはっきりしたことを言わないで、イラクの進攻をさそったのかも知れないのである。このアメリカ大使は後に、アメリカ議会で吊るし上げられていた。もちろん真相はわからない。

侵略されたクウェートがどんな国かは、『幻想・その1』（本誌第29号）に書いたから、ここでは書かない。とにかく、サウジアラビアとともに、「民主主義国」アメリカが守ってやるべき国ではないことはたしかである。しかし、アメリカは国連安全保障理事会にむりやり決議させ、多国籍軍というわけのわからない軍隊を即席でつくって、サウジアラビアに進出した。たしかに数多くの国の軍隊が参加したから「多国籍」軍であることは間違いないが、主力はアメリカ・イギリス・フランス軍であり、昔の「連合軍」の再現である。なかでも圧倒的にアメリカ軍が主力で、指揮権も米軍がとっていた。

こうして、「良い者」アメリカは、「悪者」イラクを叩き、ブッシュ大統領は90%以上の支持を得た。もっとも、その後ブッシュ大統領の支持率は下がり続け、クリントンにしてやられたが、そのとき、イラクのフセイン大統領が、「ブッシュに天罰が下った。オレの勝ちだ」と、ピストルを空へ向けて撃ち放ったというニュースはおもしろかった。

カンボジアではいま、ボル・ポト派が悪者にされている。かつて政権を取っていたとき、100万人とも200万人ともいわれる虐殺をやったグループだから、悪者に仕立てやすい。だが、国連カンボジア暫定行政機構（UNTAC）が肩入れしているブノンペン政権派なるものは、「良い者」なのか。彼らの汚職ぶりは、経済力がちがうから金額では足元にも及ばないとしても、金丸先生以上のものらしい。政権をとっている権力をフルに利用して、他の派の選挙運動を妨害し、何人も殺し、何がなんでも多数を獲得しようとしている。UNTACの総司令官明石康国連事務総長特別代表は、ときどき注意を与えるが、一向に止めようとしない。選挙結果が小党乱立になっては、その後の運営に支障ときたず、ここは最大の軍事力を持っているブノンペン政権派に勝たせたい、と考えてるとしか思えない。（そのブノンペン政権派、人民党というらしいが、は、ラナリット派、フンシンベック党に負けてしまった。あれだけ選挙干渉をやってこれだから、よっぽど人気ないんだね）

フセイン大統領にせよ、ボル・ポト派にせよ、奥野先生にせよ、「悪者」にされ

るにはやはり悪いところがあることには間違いない。だが、「悪者」にされる人が出てきたときには、むしろ「良い者」のほうを調べてみる必要がある。すると、たいてい、悪者以上に悪いことがわかる。

冷戦崩壊後の世界をリード、というのは格好をつけた言い方で、正確には、支配しようとしているのは、国連である。なかでも、安全保障理事会である。世界中のあらゆる紛争に首を突っ込み、やたらにPKOとかPKFを送り込む。それでうまくいかなければ、国連の名の下にアメリカ軍が出動する。こうして、紛争を起こす「悪者」を武力で封じ込める。

ガリなる人物が国連事務総長になってから、国連の武力介入は露骨になった。PKOはもともと、その国の要請があって初めて出て行くものである。ところが、ソマリアの場合は、要請がなかった。そこでガリ事務総長は、「ソマリアは国家として成立していない。だから、要請がなくても出動することができる」と、いわゆる民族自決の原則を否定してしまった。そして、PKOより強力な武装を持ち、積極的に「悪者」をやっつけにいく、「平和執行部隊」なるものまでつくろうと、提案している。

ガリ事務総長の後ろにアメリカがいることは明らかだろう。冷戦時代には、悪者ソ連がいたから、なんでもそのせいにして、自由にやれた。ベトナム戦争に介入した理由は、ベトナムが共産主義化すると、カンボジアもラオスもタイも、将棋倒しのように共産化していくという、ドミノ理論であった。いまは、オールマイティの悪者はいなくなった。だから、自らは表に立たず、国連を立てているのである。

(7)

このところ毎日、新聞を切り抜いている。カンボジア、モザンビーク、旧ユーゴその他、PKO関連と、平和憲法をめぐる記事に限定しているのだが、それでも相当な量となる。実は、いまから23年前、1970年にも新聞の切り抜きをやった。公害問題が一拳に明るみに出た年である。当時勤めていた神戸市の水族館で、朝日、毎日、読売、産経、神戸の5紙をとっていたが、その公害・自然破壊関係の記事をすべて切り抜いてスクラップブックにしたら、1年間で本棚3段を埋め尽くすほどの量になった。あの1年間は、新聞の切り抜きをしに水族館へ行っていたようなものであった。その後すぐに金沢へ行くことになり、誰かいらんか、と言ったら、そんなもんいらんということだったので、金沢まで持っていった。公害問題をやろうという学生でも出てきたら見せてやるつもりだったのだが、実際に見せたら、公害への関心がさめてしまっただけだった。私自身も、金沢へきてからはほとんど手にとっていない。こんど、金沢城から角間の山奥へ引っ越した際、とうとう処分した。まあ、いま切り抜いているスクラップも、いずれはこうなる運命にあることは間違いない。

それでは、切り抜く時間と労働が無駄になるではないか、という人もいるかも知れない。無駄と言えば無駄だけど、無駄でないと言えば無駄ではない。そもそも、「無駄」とは何か。それを明確にする必要がある。まあ、無駄は無駄で、そんなこと考えるだけでも無駄だ、というのも当たっているが。

世の中には、無駄な仕事と無駄でない仕事があることになっている。これも、公害問題とからんでいるのだが、生態学の中で生態系理論なるものが大流行したことがあった。自然を生態系（エコシステム）というシステムと見なそうという考えである。この考えは、国家有機体説に通ずる、なんとなくキナ臭いからほってはおけん、というわけで、やはり当時流行っていたシステム工学なるものを少し勉強したことがある。おおかたわからなかったけれど、ひとつだけ、システムには必ず目的がいる、目的を決めなければシステム工学はなりたない、ということはわかった。150年ほど前、ダーウィンが苦労して取り除いた目的論が、いつのまにか現代のシステム論にまぎれこんでいたのである。もっとも、この目的は、神様が設定したのではなく、人間様が設定したものである。

さて、まず目的を決める。そして、その目的を達成するために、何をどのようにやっていけばいいかを設計するのが、システム工学なるものらしい。その時、最小の労力で最大の効果を生むように設計するのが、システム工学の腕の見せどころである。私の読んだ本には、月へ人間を送りこんだ「アポロ計画」がその典型として紹介されていた。その本にはさすがに書いてなかったが、ベトナム戦争のとき、歩くコンピューターといわれたマクナマラ国防長官が、ベトコン（ベトナム解放のために戦っていたアメリカ軍の敵）ひとり殺すのにもっとも安上がりな方法を試算したが、これもシステム工学の典型である。計算の結果、B52という、B29よりもっと大きい戦略爆撃機のじゅうたん爆撃がいちばん安くつくことがわかったとして、北爆（北ベトナム爆撃）に踏み切った。ちなみにいうと、この考えが生態学の中へはいつまでか来て、生き物が生きていくのに最小のエネルギーしか使わなかったものが進化の競争に勝ち抜く、などという人が出てきている。費用対効果比などと、無神経に使っているのが、気分が悪い。

こういうことを言うと、システム工学自身は、価値観と関係のない科学理論であって、いかなる目的が設定されても、冷酷に計算するだけなのだ、その目的が良いか悪いかを判断するものではない。システム工学に責任はない、それは目的を設定する人の責任だ、などと反論される。人食い虎を撃ち殺すのも人間を射殺するのも、おなじ弾丸ではないか。その弾丸に、もしくは弾丸をつくった人に、責任を問われても困る、というわけである。ベトナム戦争のとき、ある兵器メーカーの労働者が、「自分のつくっている銃砲の弾丸が、ベトナム人を撃ち殺していると思うと、毎日の労働が辛い」となげいていたことがあった。理論をつくる人は、せめてこれくらいの気持を持ってほしい。悪いのは目的設定者だ、などと開き直らずに。

さて、このシステム工学は、ある目的を達成するために、あらゆる「無駄」をは

ぶく理論である。これを、生産に応用すると、いわゆる合理化になる。無駄という言葉は、現代このように使われている。だから、目的が単純で明確なことほど、システム工学は力を発揮する。たとえば、大学入試に合格するという目的を立てれば、どのように勉強したらいいかという方法はすでに確立していて、それは、塾や受験雑誌で明らかにされている。つまり、無駄のない勉強ができるのである。もっとも、それでも失敗したら、目的を果たせなかったのだから、全部「無駄」になってしまうが。ところが、目的が複雑でばくぜんとしていると、システム工学はあまり役に立たない。将来どんな人間として生きていくかといった「目的」を立てると、果たして、受験用の勉強は役に立つのだろうか。

人間とは、いっばい無駄をしなければ一人前にならない生き物だと思う。無駄のない人生を送ってきた人は、偉くなる（これは社会的地位が高くなる、という意味です）けど、あんまりおもしろくない人間になる確立が高い。無駄ばかりしてきた人は、偉くはなれないけど、おもしろい人間になる。今の社会は、社会的地位を求めて競争するのが当然になっているから、無駄をはぶき、合理化が正しいとされているだけである。よって、システム工学が幅をきかせ、生態学の中まで潜りこんでくる。

(8)

こんな「無駄」な話をする予定ではなかった。とにかく私はこのところ、毎日新聞のスクラップをつくっていて、その中に、おもしろい記事があったから紹介するのが「目的」であった。

それは、カンボジアで文民警察官が射殺され、大騒ぎになっている日本のマスコミの論議を、アメリカの新聞がどのように報道しているか、という記事である（朝日新聞5月17日付）。短い記事だから、全文紹介しておこう。

PKO論議 米各紙が報道

【ワシントン15日＝吉田慎一】カンボジアのPKOでの日本人文民警察官殺傷事件をきっかけに、日本で要員引き揚げ論を含む大きな論議が起きていることが、米国の新聞などで継続的に報じられるようになった。国際貢献に乗り出した日本にとっての「ジレンマ」などとして日本の試練と見る報道が多いが、国連安保理の常任理事国入りを希望してきた日本の立場とからめて論議の行方を注目する記事も目だっている。／東京特派員電で日本国内のカンボジア撤退論の高まりを伝える各紙の記事では、日本政府が「非武装の国民を暴力のさなかに置き続けて国内的非難を受けるか、撤退させようとして国際的非難を受けるか、の選択に直面している」（13日付ニューヨーク・タイムズ）とのとらえ方が一般的。同紙は、死者が増加すれば宮沢首相が国内圧力に耐えられるかどうか不明だと報じ、また14日のロサンゼ

ルス・タイムズは「国内的危機」と表現した。／ この状況については「カネによる貢献を超え、国際的役割を見いだそうという日本の能力に対する疑問を再び表面化させた」（11日付ワシントン・ポスト）との論評もある。ニューヨーク・タイムズは「もっと多くの死者を出しているブルガリア、フィリピンなどの軍隊の安全より、自国の軍隊の安全を重視しようとしているとの批判が浴びせられている」と指摘する一方、戦後の平和憲法のもとで培われた「国民風土」が背景にある、と報じた。／ 安保理常任理事国入り問題は、撤退論と対比する形で言及され、撤退が「日本の国際的立場を弱める」との見方は多い。サンフランシスコ・クロニクル紙は11日の社説で、撤退論について「そうした対応をすれば、いまだにおおざらした日本の平和維持活動への参加を一気に後退させ、ボル・ボト派の大勝利を導くことになる」と論じた。

日本が、国連安全保障理事会の常任理事国にはいりたいという、強烈な希望を持っていることは明らかなのだが、実は日本政府は公式にこれを国民に発表したことはない。だから、「公然の秘密」と言わねばなるまい。日本に基地を置くアメリカ海軍の航空母艦や巡洋艦が原子爆弾を持っているのに、日本政府が認めていないのと同じである。ところが、このアメリカの記事を見れば明らかなように、アメリカでは、日本がその希望を持っていることを前提にしている。「国内的危機」を敢えて犯して、カンボジアの自衛隊を引き揚げないのは、そんなことしたら、せっかくうまくいきそうな常任理事国入りが振り出しにもどってしまうからだ、と明白に解説しているのである。

日本が安保理の常任理事国になるということは、かつての枢軸国であり、敵国であった日本が、名実ともに連合国の一員となり、世界の「大国」の仲間入りすることである。アメリカや西欧先進諸国とともに、世界をリードする、より正確に言えば、世界を支配する国になるということである。

白人諸帝国はここ2、300年の間、世界を支配してきた。そして、その基本は、白人以外の人種を蔑視することであった。アフリカでもアメリカでもアジアでも、白人は一段高い人種として君臨した。その意識は抜きがたい。そんな意識を持った白人が、なぜベトナムで、イラクで、カンボジアで、命をかけて戦争に参加するのか。

それは、彼らがそういう意識を持っているからなのである。日本の武士階級でもそうだったが、ヨーロッパ中世の騎士は、 んは支配階級として贅沢な暮らしを楽しんでいたが、いざ外敵がきた場合には、命を惜しまず戦うことになっていた。支配階級には国民を守る義務が課されていたのである。なぜ守るのか。もし外敵に国民がやられてしまえば、自分達の生活の源が枯れる。けっして、国民のために戦うのではない、自分達の高い生活水準を守るために戦うのである。

いま大国は、あるいは、大国の意を受けた国連は、小国のいざこざに首を突っこ

んで、それをおさえようとする。飢餓で苦しんでいる人がいる、内戦で殺される子供たちがいる、これを放っておくのは「人道問題」だ、というわけである。カンボジアでもモザンビークでもソマリアでも旧ユーゴでも、古くはビアフラでも、たしかにそれは人道問題ではある。だが、その人道問題を引き起こしたのはだれかというところ、それぞれの国の人たちではない。彼らは有史以来、結構平和に暮らしてきたのである。もちろん、それぞれ大変な時代はあったろう。でも、日本を含めて、先進諸国だって、歴史をひもとけば、とんでもない時代をいくつも持っていることはすぐわかる。

これも、切り抜いた新聞記事から、自衛隊の第2の派遣地、モザンビークの悲劇がどのように生じたかを紹介しておこう。（朝日：5月15日付）

モザンビークがポルトガルの植民地から独立したのは1975年であった。「モザンビーク解放戦線」というグループが、解放闘争の末、政権を握る。ところが、その前年の1974年に、すでに反政府組織ができていた。政府がないのに反政府組織ができるというもおかしいが、独立やむなしという情勢になって、独立する前からそれをつぶしにかかったというわけである。その「モザンビーク民族抵抗運動」は、隣の国ローデシアの白人政権が、旧宗主国ポルトガルとともにつくったものであった。こうして、独立したモザンビークはたちまち内戦の渦に巻き込まれていく。そして、1980年、ローデシアの白人政権がたおれ、黒人政権ができてジンバブエになると、今度は悪名高き南アフリカ共和国が支援に乗り出した。こうして、1992年10月に和平協定が結ばれるまでの間に、60万人とも100万人ともいわれる人命が失われ、国土は荒廃し、飢餓が広まっていったわけである。

旧ユーゴの内戦は、この間、「金沢大学平和問題ネットワーク」の討論集会で専門家から話を聞いたが、ちとややこしすぎて紹介できないけれども、というのは、私にもよくわからないからだけれども、いま内戦で悲惨な状態になっている国は、だいたいにおいてモザンビークと同じような経過をたどっている。後ろについている国が、アメリカだったりイギリスだったりフランスだったり、ソ連だったり中国だったり、しているだけである。つまり、紛争の火種をまき、武器援助という油を注いでいたのは、安保理常任理事国を中心とした白人帝国であったことに間違いはない。自分で火をつけて、自分で消しに行くことを、「マッチポンプ」と称する。国連PKOは「ポンプ」である。だが「マッチ」のほうの責任を問われたことはない

「ポンプ」の功績だけを主張して「マッチ」の責任を回避する。そこに一番大きな問題がある。いまでも5大常任理事国は、武器を売っている一番から五番までの国である。

もう一つ、おもしろい記事を紹介しておこう。紛争を起こし国連がPKOを派遣した国の経済事情である。(朝日：5月9日付)

下の表を見てほしい。

紛争国の経済(人口は91年統計による)

国名・人口	一人当たりGNP	国家予算
カンボジア 844万人	200ドル (91年)	24億ドル(92年) (2640億円)
ソマリア 769万人	150ドル (90年)	1億2000万ドル(91年) ¹⁾ (112億円)
モザンビーク 1608万人	70ドル (91年)	1億7000万ドル(92年歳入) (187億円)
アンゴラ 1030万人	92ドル (90年)	23億ドル(92年歳入) (2540億円)

1人あたりGNPは、カンボジア200ドル(22000円)・ソマリア150ドル(16000円)・アンゴラ92ドル(10000円)とつづき、今度自衛隊が出張したモザンビークにいたっては、何と70ドル(8000円)にすぎない。GNPとは国民総生産のことで、1年の間に国民全部が稼ぎ出した総額のことである。1人あたりGNPは、年収とは違うが、年収と見て比較すると、私の1日分の半分以下である。

そんな国へ我が自衛隊は進駐した。果たして、モザンビークの人たちの気持がわかるだろうか。

フランス革命前夜、かのマリー・アントアネット王妃は、側近から、「人民が、パンを食べられないと言って騒いでおります」と聞かされ、「パンが食べられないのだったら、ケーキを食べればいいのに」と言ったという、有名な話がある。彼女は皮肉で言ったのではない。善意で言ったのである。人はすべて、自分を中心にしてものを考える。あまりに生活に較差がありすぎると、相手の気持はわからないのである。人民のほうもまた、アントアネットの気持はわからない。

モザンビークの人たちと、我が自衛隊員の較差もまた、アントアネットと当時のフランス人民の較差くらいありそうである。こうなると、並の善意は通用しない。富めるものが貧しいものを、ああ、可哀そうだ、と助けるのは、ボランティア(奉

仕)ではない。それは、慈善という。慈善と言うのは、慈しみ善を施すことで、一段も二段も高いところから哀れむことである。奉仕とは、読んで字のごとく、捧げ仕ることで、同列もしくは下から助けることである。だから、慈善ならともかく、ボランティアは、助けようとする相手の人たちと同じ生活をするのが大原則だという。でなければ、信頼は得られない。

このことは、別にカンボジアやらモザンビークまではるばる出かけなくとも、日本のなかでもちょっと注意すれば、すぐ理解できる。水族館にいたとき、飼育係は大学出の正規の職員と、高卒の臨時職員とから構成されていた。私はもちろん、大学院を出た、最高の学歴の保有者である。でも、どういうわけか、高卒の連中のほうがつき合いやすかった。そこで、できるだけ高卒職員と同じように仕事をするように努めたのだが、なかなかうまくとけこめない。こっちがそのつもりでも、向こうが仲間として認めてくれないのである。これは、今から思えば当たり前の話だが、そのころは若かったし、初めて職に就いたほやほやの社会人だったから、いろいろと考えあぐねたことを思い出す。口や態度で、仲間みたいにふるまっても、やつらはどうせそのうち偉くなっていく。そしたら、今度は上から命令するだけになるだろう。

たしかにその通りで、数年たつと、それまでいっしょに仕事もし、宿直もしていた大学出は係長に出世して、宿直からはなれ、現場の仕事をせずに高卒職員を使うだけになっていった。私は係長にならず、ずっといっしょに宿直していたので、10年目くらいから、少し信用されるようにはなってきた。もっとも、そのあと、大学助教授に「出世」してしまったから、また信用をなくしたにちがいない。

大卒と高卒の間にも、かくのごとく超えられない溝がある。ましてや、年収70ドルの国の人と、年収6万ドルのわれわれとが、心を一にして、国づくりにはげむなど、考えただけで気持が悪い。その国にほんとうに住み着き、同じ暮らしをし、いかなる事態になっても逃げ出さない。そこまでしないと、真のボランティアはできない。できるのはせいぜい慈善である。だから、むしろ、慈善をしているのだと自覚しているほうがまだましなことができる。慈善しながら奉仕だと誤解するのがいちばん悪い。それを偽善と言う。

(10)

カンボジアのボランティアや自衛隊を見ていると、私は、いまから20年ほど前の、生態学者の自然保護運動を思い出した。

生態学者はどういうわけか、自然を保護したが。そこで、田舎へ出かけて行って、開発するな、自然を残せ、カモシカは捕るな、サルを保護せよ、と地元の人に説いて聞かせる。カモシカやサルが、丹精こめて作った農作物を食べ荒らしていても、である。そして、田舎の入がいうことをきかないと、学者の権威を利用して、

地方自治体を動かし、条令をつくったりして地元をおどかす。そして、何よりもいけないのは、彼らは街にすみ、街の利便を満喫し、夜になると街へ帰ってしまうことである。そして、街にあきたら、田舎へ出かけて、自然を楽しむ。ただそのために自然を保護さされたら、カモシカやサルにいじめられる地元の人にはたまらないだろう。

その地域のことは、その地域に「住んでいる」人がすべてを決めるべきであって、よそ者がとやかく言うてはいけない。もし、その地域に住む人が、なにか相談にすれば、初めて意見を言えばいいのである。ただし、その場合でも、あくまで相談に乗るだけにしておかなければならない。ただそれだけのことが、学者にはできない。相談に乗っているつもりで、実際にはすべて引き回してしまう。学者は偉すぎるのである。いや、ほんとうに偉かったらいいのだが、偉くもないのに偉いと思すぎているのである。

自分を偉いと思うのは、他人を馬鹿だと思っていることである。人間の価値基準は、アインシュタイン以来、相対的なものになったから、他人を馬鹿にしなければ、自分を偉いとは思えないことになっている。とくに、田舎の人々は賢くないと思っている。だから、常に指導しようと、教育的配慮をめぐらす。

ところが、ほんとうは、田舎の人のほうがはるかに賢い。田舎の人は、自分が偉いなどとは思っていない。学者のほうが賢いと思っている。だから偉いのである。かのソクラテスが言っているのではないか。「知ルヲモッテ知ルト為ス、知ラズヲモッテ知ラズト為ス、是レ知ルナリ」と。いや、これは孔子だった。まあいいや。同じことだ。

白人も日本人も、カンボジア人は民主主義も近代合理主義も知らない、無知蒙昧のやからだと、心の底では思っている。だから、偉いおれたちが、何もかも教えてやらなければならないのだ。そう信じてカンボジアへ出かけていき、いろいろ教えてやっている。5月のカンボジア総選挙は、投票率何と90%という、大成功だった。おれたちが教えてやったからだ、と、彼らは思ったに違いない。もちろん、その成果もあっただろう。しかし、なぜこの信じられない成功が生まれたかは、カンボジア人が選挙を今、必要としていたからに過ぎない。もし、カンボジア人が、必要でないと思えば、いくら教えられても選挙なんかに行かなかったであろう。選挙のこまかなテクニックや、やり方などは知らなかったかもしれない。しかし、選挙の意味と必要性は、教えられなくても彼らは充分ご存じなのである。

1954年というからそうとう古いが、アメリカのロックフェラー財団とインド政府が協力して、インド・パンジャブ州のある農村で、「人口抑制の調査と実験」を、16年間に渡って実施したことがあった。インドのような開発途上国が貧しいのは、生産の伸びを人口増加が追い越しているからだ。だから、貧しい国を豊にするためには人口抑制が第一に必要である、という「哲学」のもとに、この実験は行なわれた。

まず、最初の1年は、産児制限の必要性の教育と、その希望の有無を調べる。次の1年の間に、希望者に避妊具・避妊薬を渡す。そして、10年以上に渡って、その地区の出生率が他の地区よりどれくらい低下したかを調査する。

インドの農民は、産児制限の希望をし、避妊薬を受け取った。成功間違いなしとよろこんだのだが、出生率は全然下がらなかった。彼らは、避妊薬をもらっても使わなかったのである。実験は失敗した。報告書にはこう書かれている。

「我々西洋の人間は、人間の尊厳、生活を非常に尊重する。しかし、パンジャブの農民たちは、必ずしもそうした感情を持ちあわせていないようである。人々が際限もなく増えていくことに対する恐怖は、ある人々にとっては常識であったとしても、パンジャブの農民たちはかならずしもそうした見方をしていない」

慎重な言い方をしてはいるが、要するに、西洋の基準を当てはめて、インドの農民は「人間」以下の存在だと言っているのである。調査した「インド」の研究者さえこう言う。

「要するに農民たちは教育がないし、無知なんですな。彼らに必要なのは、何にも増して教育なんですよ」

産児制限の希望をし、避妊具・避妊薬を受け取り、全く使わなかった農民は、どう言っているか。

この「調査と実験」を克明に調べたアメリカの学者マフモード・マンダニは、ある農民に聞いてみた。

「パーブジー（親父さんの意）、いつかあなたも分かって下さるでしょう。時にはウソも方便、ということもありますよ。人を傷つけずにすむし、第一そう答えることが調査班の人々を助けることにさえなるかもしれないしね」

農民はすべてちゃんと知っていたのである。ただし、産児制限をするつもりはなかった。子供をたくさんつくり、ただの労働力として使わなければ生きていけなかったからである。こういう農民もいた。

「あの運中は、子供を産まなくてもすむ薬をタダでやると言っていたけど、そのくせ、子供を産めなくて困っている人たちを助ける薬は持っていない。そんな薬があったら私たちも使うんですがね」

「無知」な農民に、ロックフェラー財団とインド政府の「有知」な研究者は手玉にとられ、実験は全面的に失敗してしまった。（くわしくは、マンダニ・自主講座人口論グループ訳『反「人口抑制の論理」』風涛社1976参照。なお、私の悪名高い名著『生態学入門』創元社にもくわしく引用してある）

政府や財団の意図は明白だが、ボランティアとして実際に現地へ行って努力している人の「善意」は疑わない。だが、善意ほどやっかいなものはない。悪意のほうがまだ扱いやすい。そして、その「善意の人」もまた、偉い自分が無知な農民に教えてやるのだという精神構造から、なかなか逃れられないのである。私は、無知な漁師に「科学的魚のと리카た」を教えにいった、逆に魚の生態学を教えてもらって

から、なんとか理解できるようになった。だが、自信はないから、そんなところへは行かない。

もちろん、よくわかって努力している、ほんとうに偉い人もいる。最近、『カンボジア最前線』（岩波新書）という本を書いた、熊岡路矢という方は、数少ないそういう人である。御用とお急ぎのない方は、一読されたい。

話はまだ続くのだが、紙面がいっぱいになった。読者には気の毒だが、いや気の毒でないかも知れないが、つづきは次号ということにする。その次号がいつ出ることやら。

『犬死に』考

奥野良之助

(1)

「犬死に」という言葉がある。手元の国語辞典でひくと、「なんの役にもたらずに死ぬこと。むだ死に。徒死」とある。

ここまで書いて、というほども書いてないが、ふと気になった。犬が死ぬのだから「犬死に」にはちがいないが、犬が死ぬのはすべて「むだ死に」なのだろうか。そんなことはない。アルプスで遭難した登山者を助けて自分は死んだ、遭難救助犬がいたではないか。いなかったかな。でも、いそうではないか。もしいけば、けっこう「役にたって死」んでいることになる。犬が死んでも、これは「犬死に」ではない。

これは明らかに、犬にたいする差別用語である。

犬と違って猫は、人を助けて死んだという話は聞かない。遭難救助犬はいても、遭難救助猫はいない。この間、野球場のフェンスにひっかかって下りられなくなった猫を、消防の梯子車やら電気工事のクレーン車やらが出てきて、やっと救出したという話をテレビでやっていた。猫一匹に梯子車やクレーン車まで出てくるのはどうかと思うが、そしてそれをまたテレビのニュースで放送するのは、さらにどうかと思うが、まあそれは、日本が平和である象徴だということにしておこう。だから、猫は人を助けない。でも、人は猫を助ける。

この時、もし助けにいった人がクレーン車から落ちて死んだらどうなるか。猫はその人を犬死にしたとは言わないだろう。だが、人から見れば、まさに犬死にである。猫を助けそこなって犬死にしたというのも、なんだか変だが。

だから、犬死よりも猫死にのほうが、差別的ではない。これからは、犬死にではなく猫死にと言わなければならない。

もっとも、猫だってむだではなく、有意義に死ぬこともある。我が家の庭へ、近所の飼い猫や野良猫が我がもの顔ではいってくるが、猫嫌いの家内は毎日頭にきて、猫と追いかけあいを演じている。もしこれらの猫が死んでくれたら、家内が頭にくることもなく、我が家には平和がもどる。だから、この猫死には犬死にではない。いや、猫死にではない。

同じ猫でも、イリオモテヤマネコになると、また話が違ってくる。エリザベス女王の旦那のフィリップ殿下が、西表島民を移住させてもイリオモテヤマネコを守るべきだと言ったとかで、西表の人たちがおおいに怒ったことがある。この猫は、そ

れほど貴重な生き物なのである。移住はさせられなかったけれど、イノシシわなが禁止されたり、いろいろと迷惑をこうむっている。だから、イリオモテヤマネコが死に絶えたら、フィリップ殿下は悲しむが、西表の人々はほっとするだろう。その死はおおいに有意義である。むだ死にを犬死にというのなら、その反対語として、有意義な死は、「イリオモテヤマネコ死に」ということにしたらどうだろうか。

猫死にといわずに犬死にというのは、犬という言葉に、名詞につく接頭語として、「いやしい」とか「むだ」「無益」などという意味があるかららしい。そういえば、若いころはわれわれもよく、お巡りさんのことを「政府の犬」などと呼んでいた。

これは、犬が飼い主に、際限のない忠節を尽くすことからきているのだろう。教授の言いなりになって忠節を尽くしている学生を見ると、そう思わぬでもないが、言うわけにはいかないから、思うだけにしている。

(2)

そんな話をするつもりではなかった。

アメリカへ留学にいて、間違えて隣の家に入ろうとして殺された服部君という高校生がいた。その犯人が裁判で無罪になって、服部君の父親が、「これでは犬死にになってしまう」とつぶやいたというニュースを見て、「犬死に」とは何かを考え始めたのであった。

もし、犯人が有罪になって、刑務所に収容されたら、彼の死は犬死ににならないのだろうか。そうではなからう。父親は、息子の死がきっかけになって、アメリカの銃社会が少しでも改善され、今後日本の留学生がそんな目に合わないことを望んでいるという。もしそうなれば、彼の死は「なんの役にもたたなかった死」ではなくなるからである。息子は死んだが、そのおかげで、アメリカ社会がよいほうへ変わった。息子はお役に立ったのだ。

ただし、これは父親からみた話である。当の本人になると、また話は違う。彼は、アメリカ社会を改革するために、わざと撃たれたのではない。撃たれるつもりはないのに、撃たれてしまったのである。結果としてアメリカ社会が改革されようが、そんな事は彼の知ったことではない。父親から見れば犬死にでなくなったが、本人から見ても犬死にでなくなったとは言えそうにない。

なぜこんなことになるのか。それは、専門の国語学者にけちをつけて申し訳ないが、犬死にの定義が不完全だからである。犬死にとは、国語辞典によると、「なんの役にもたたず死ぬこと」であった。この定義は明確なようで明確でない。役に立つというからには、誰かの、という目的語がいる。それが書いてないからである。

誰の役に立てばいいのか。

役に立つ対象は、基本的には、自分か他人かの二つであろう。まず、自分自身に役に立つ死のほうから考察しよう。

死ぬほうが生きるよりも、自分にとって役に立つというのは、自殺一般がそうである。人は、生きているより死ぬほうが楽だというとき、自殺する。どんな意味で楽かは、その人、その場合でいろいろだろう。病苦に責められ死んだほうがまだと自殺する人は多い。借金取りにおいまくられて死ぬのも、このなかにはいる。今の法律では、借金は相続しなくてもいいから、子供のためにもなる。ただし、もっといいのは、生命保険に入っておいて死ぬことである。借金も払えるし、子供も助かる。もっとも、入って一年以内に自殺すると、保険金は払ってくれない。いざというときにはもうおそく、だから、そうなる恐れのある人は、早い目に保険に入っておかなければならない。名誉心の強い人は、名誉を傷つけられたとき、生きているより死を選ぶかも知れない。もっとも、昔の武士ならともかく、このごろではそんな話、あんまり聞いたことはない。名誉が台無しになろうが、恥をかこうが、みんな生きつづける。悪いと言っているのではない。いいことである。悪いことをした偉い人がすぐに死んで、見せしめにならないではないか。

自分にとって役に立つ死、つまり自殺は、だから、犬死にとはいわない。「イリオモテヤマネコ死に」である。

若者が七半を走らせて、まあゼロ半つまり原チャリでもいいが、どこかへ激突して死んだ場合、やや犬死にという感じがするが、これも本人の身になってみれば、いちばん好きなバイクを飛ばしながらあの世へ行けるのだから、結構満足して死ぬのではないかと、ゼロ半暴走族の私は思う。残された親はたまらないけどね。

それでは、本人が満足しない死を、犬死にというのだろうか。

自殺でない死、事故とか病気とかで死んだ場合は、たいてい本人は納得していないだろう。人間年齢をとるほど生に執着するというから、天寿を全うして死んでも、恨みは残る。これは「なんの役にもたない死」だから、とうぜん犬死にというべきだが、やはり犬死にとは言わない。

そうすると、「役にたつ」の目的語の中に、自分自身ははいていないと考えざるを得ない。

そんなこと、初めから分かってるやないか、と言われるかも知れないが、わかりきったことを一つ一つ考察していくのが学問なのである。わかっていることを調べても研究ではない、などと決めると、大学から研究が消えてしまう。まあ、消えても私は差し支えないのだが。

(3)

かくて、「役にたない」の目的語は、厳正なる考察の結果、「他人」ということになった。自分にとって役に立つか立たないかは関係なく、他人にとって役に立たない死は「犬死に」で、役に立つ死は「イリオモテヤマネコ死に」ということになる。

さて、こうなると、いろいろなケースが考えられる。子供でも友達でも恋人でも良いが、川へはまって溺れかけている。飛びこんで助けたが、自分は溺れて死んでしまった。これは断じて犬死にはない。イリオモテヤマネコ死にである。子供が溺れていると思って飛びこんだが、子供のほうが泳ぎがうまく、勝手に岸へ上がってしまい、自分だけ溺れて死ねば、これはどうやら犬死になりそうである。

子供がまだ小さいのに死んでしまった父親、母親も入れておかないとF女史に叱られるからいれておくが、は、犬死にだろうか。なんの役にも立たずに死んだという定義には合うが、普通は犬死にはと言わないようである。こういうのは無責任な死に方で、しいていうなら、「植木ひと死」とでも言うべきだろう。同じ父親あるいは母親でも、たくさん財産をかかえて、子供が定年になるころまで生きていたら、イリオモテヤマネコ死を遂げることになる。

こう考えていくと、ほとんどの人の死は、「イリオモテヤマネコ死に」か「植木ひと死」であって、「犬死に」ではない。犬死には滅多になくなる。溺れてもいない子供を助けに飛びこんで、時分だけ死んでしまうなどということは、常に起こるとは思えない。

ひょっとすると、自分自身と同様、他人もまた、「役に立つ」の対象ではないのかも知れない。だが、自分も他人も対象から外れると、何も残らなくなる。かくて「犬死に」の定義に危機が生ずる。

(4)

カンボジアで二人の日本人が亡くなった。国連ボランティアの中田厚仁君と文民警察官高田晴行氏とである。

中田君は自らの意志で、カンボジア人のために働いていた。私はそんなことようしないから、立派な行為であると尊敬している。だが、彼は、ボル・ポト派か、それとも選挙要員に採用されなかった恨みからか、いずれにしても当のカンボジア人に殺されてしまった。彼の善意はどうやら、すべてのカンボジア人には理解されていなかったらしい。

高田警部の場合はすこし事情が異なる。彼は、応募したのだろうが、純粋に自分の意志で行ったわけではない。ましてや、「安全だ、安全だ」と国も警察庁も保障していたのだから、命を賭けるつもりでは行っていなかっただろう。にもかかわらず、殺されてしまった。

私がもし彼らの父親だったら、アメリカで撃ち殺された服部君の父親同様、「これでは犬死にだ」とつぶやいただろう。私はもともと、本人自身が納得しているのであれば、息子が「犬死に」したってかまわない。「植木ひと死」は困る。なぜなら、もし子供、私から見たら孫、でもいたら、さっそく負担がこちらにかかってくるからである。だが、ふつうは、息子が犬死にするといい気はしないものである。

そこで、息子を犬死にから救うために、その死を美化する行為が始まる。中田君の場合は、父親がそれをやった。そして、政府も、中田君を表彰してその後押しをした。

高田氏の場合は、もっと露骨である。葬儀には、官房長官をはじめ、現職閣僚が何人も参列し、勲章を下賜し、殉職補償金を上積みした。カンボジアの殉職場所に記念碑を建てるという計画まであるらしい。

ここまでくると、「誰の役に立つか」の誰は、国家であると思わざるを得ない。彼らは、日本という「国家」のために死んだのである。だから、「犬死に」ではない

東京・渋谷の忠犬ハチ公は、帰ってこない主人を毎日駅まで迎えにいった、ついに飢え死にした。明治政府はこれをたたえて銅像をつくる。主人を国家におきかえたのである。国家に役立つ死は犬死にでなく、国家に役立たない死は犬死にである。だから、彼らの死が犬死にでなくするためのさまざまな手段がとられる。そうしないと、あとに続くものが出てこないからである。

つい50年ほどまえ、日本は中国を侵略して、何十万という兵隊が死んだ。すべて犬死にである。学徒動員された大学生が、自らの行為を非と知りながら、なんとかそこに意義を認めて、自分の死を犬死にと思わないようにするために、いかに苦しみ悩んだかは、『きけわだつみのこえ』（岩波文庫）に収録されている。

もっとも、彼らは高田氏のように、手厚く表彰されたわけではない。なにしろ数が多いから、政府だって手が回らない。勲章は結構乱発されたが、みんなに当たったわけではない。多くの兵隊は、「恩賜の煙草」ですまされた。これは、当時市販されていた口付煙草『朝日』に、菊の御紋章を印刷しただけのものである。煙草1本で、犬死にが犬死にでなくなるのである。

高田氏に、そうとう多額の殉職補償金が出るというのは、良いことである。それは、政府が自衛隊を海外派遣しても、あまり危険なところへ行かせられない歯止めになる。何百人も戦死すれば、財政が破綻してしまう。

ただし、これは、今日本が志願兵制度だからであって、もし徴兵制度になれば、そんな金は出さなくてすむ。いやおうなく若者を集めて、兵隊に仕立てればいいのだから、煙草1本で命が買える。

天皇が中田君と高田氏に、「恩賜の饅頭」を贈ったという記事を見て、そろそろ始まったなと思ったのは、私だけではないだろう。

(5)

決して素直でも真面目でもないある女子学生が私のところへきて、「私、これから、素直で真面目な良い子をめざします」といったものだから、私は驚愕した。

「真面目で素直いうたら、親とか先生とか、偉い人のいうことをよく聞くという

ことやな」 彼女はしばらく考えて、「そうです」「では、おれの言うことを聞くか」

彼女はまたしばらく考えて、「いやです」

素直とか真面目とかいう言葉にも、犬死と同じで、誰に対して、という対象が隠されている。偉い人、ひいては国家のことを、素直に聞くのが「真面目」である。偉い人や国家のことを聞かない奴は、「不真面目」となる。

だが、対象を自分自身にとれば、話は変わってくる。国家の方針と自分の方針がちがっても、国家の言うことを聞く、いわゆる真面目な人というのは、自分の心を裏切らなければならない。逆に、自分の気持に忠実であろうとすれば、国家の方針に逆らわねばならない。どちらが、本当に『真面目』なのだろうか。優等生か、それとも暴走族か。

言葉には、かくのごとく、国家体制ががっちりと組みこまれている。すべて国家を基準として使われているのである。真面目にやれ、素直になれ、責任をとれ。そう言われたら、「誰に対して」と問い直そう。

自分自身に真面目、素直であるのが、言葉本来の意味である。基準を自分におけば、全ての言葉がその意味を逆転する。真面目は不真面目となり、責任は無責任になり、犬死にはイリオモテヤマネコ死となる。

こんなことしてると、出世は出来ない。しかし、カンボジアやモザンビークで犬死にすることはなくなる。われわれはイリオモテヤマネコ死を目指そう。「植木ひと死」でもいいけどね。

金沢大学平和問題ネットワークの果敢なる戦い（その3）

そろそろ潰れているころだろうと思っておられる会員もおられるだろうと思いますが、わが「金沢大学平和問題ネットワーク」は、どういうわけか健在で、なおも「ニュース」を発行しつづけています。前号で14号まで紹介しましたが、いま（1993年6月）や34号、ついに「日本生物学会誌」の号数を上回りました。その割には、カンボジアから自衛隊がなかなか帰ってきませんけど。

前号のように全紙面を転載すると、この号はそれで埋まってお釣りがきそうなので、今回はその中から、「理学部一教官」なる人が投稿した「意見」だけを紹介することにします。変なことばかり書いてる人です。

なお、この間2回、香林坊という金沢の繁華街で、市民にピラをまきました。そのピラの文面もあわせて収録しておきます。

（「ネットワーク・ニュース」16号より）

善 と 悪

たまたまプラトンの『国家』を読んでいたら、「悪しき人は善き人を害することができるが、善き人はたとえ悪しき人に対しても害を与えることはできない」と、ソクラテスが言っていました。逆にいうと、常に被害をこうむっている人こそ「善人」であるということになります。善人って、損ですね。

この図式をカンボジアに当てはめると、カンボジア民衆はいちばん善人です。わが自衛隊員は、どうも悪人になりそうですが、彼らとて自分の純粋な意思ではるばるカンボジアまで出かけていったわけではありませんから、被害者でもあります。いちばん悪いのは、派遣した人のようです。

もっとも、彼らとて、カンボジア民衆を救うために自衛隊を派遣するのだと、その「善意」を強調します。まあ、彼らの「善意」を信用する人は少ないと思いますが。でも、「国際貢献」に賛成している国民の多くの「善意」は疑えません。ところが、そうした「善意」が国の進路を誤らせ、とんでもない結果を導くことは、明治以来の日本の歴史の教えるところです。

「善意の人」が結果として悪事に「貢献」してしまうのを、どう考えればいいのか、これまで私が読んだプラトンには出ていませんでした。また、常に被害者になる運命の「善人」は、どうすればいいのかも書いてありませんでした。

これは、結局ソクラテスに言い負かされてしまうのですが、ポレマルコスがこん

なことを言っています。「正義とは、友を益し、敵を害することだ」

私は、これが最も正しいのではないかと、いま考えています。ただし、誰が「敵」で誰が「友」かという判断が、なかなか難しいのですが。 (理学部一教官)

(17号より)

自衛隊をカンボジアから呼び返そう

— 撤退のチャンスは今しかない —

われらの自衛隊が道路工事に行っているカンボジアの情勢が、急速に悪化しているようです。10月下旬からの新聞記事の見出しをならべてみます。

ボト派説得 難航必死 日本とタイ、最終工作開始 局地的衝突の恐れ (1992年10月23日・朝日新聞)

武装解除を凍結 UNTACの明石代表方針「ボト派と不均衡」(同上)

怨念深く情勢混とん カンボジア・パリ協定から1年 決め手を欠く各派和解 武装解除も暗礁に(同上)

短銃強盗続発 プノンペン 軍からやみ市場へ UNTAC尽力で釈放の元囚人も(10月29日・朝日)

資材や治安に不安残し・・・国道補修に着手 カンボジアPKO本格化(同上)

プノンペン周辺被弾? 隣接4村にロケット弾 ボト派否定(10月31日・朝日)

ボト派、仲裁案拒否 日・タイ説得工作は不調(同上)

ボト派、要衝狙い南下 プノンペン政権も警戒態勢(10月31日・北国夕刊)

自衛隊派遣見直しせぬ 首相が強調(11月5日・朝日)

武装解除拒否のボト派 南下で砲撃戦続く カンボジア中部(11月7日・北国夕刊)

ボト派抜き選挙も SNC特別会合 説得、不調に終わる(11月9日・朝日)

ボト派と政府軍の兵士は同じ舟でやって来た 情報交錯する境界線：カンボジア・ルボ(同上)

ボト派、国連監視所を攻撃か(同上)

虐殺恐れるベトナム系住民 ボト派の襲撃続く 母国に逃れた仲間たちも(11月9日・北国夕刊)

プノンペン政府 財政赤字深刻化 国際的な金融支援要請 ボト派は反対姿勢 政治問題化懸念の声も(11月10日・朝日)

ボト派ぬきで急ピッチ カンボジア総選挙 武力対決の危険も消えず(11月1

1日・朝日)

インフレも急ピッチ。給与は頼りにならず 庶民の人気はとばく場 ポト派は政権攻撃の好材料に(同上)

要するにあらゆる説得工作を拒み、武器と兵力を温存しているボル・ポト派が、いよいよ攻勢に出始め、首都プノンベン周辺に進出しつつあるというのが、現在のカンボジアの情勢です。これに対抗するために、プノンベン政府軍のほうも武装解除を凍結し、これにUNTAAC明石代表が許可を与えています。つまり、いつ内戦が再開してもおかしくない情勢なのです。

PKOによる自衛隊の海外派遣は、紛争当事者すべての停戦合意が絶対条件でした。その合意はいまや完全に崩れ去っています。自衛隊が派遣される条件はないのです。

ところが、政府はもちろん、あらゆる厳重な歯止めをかけたからといってPKO法に賛成した公明・民社両党も、自衛隊を呼び返そうとはまったく言っていません。わずかに、11月4日の衆議院本会議で、社会党の田辺委員長が、一言質問しています。全文引用しておきましょう。

「社会党の田辺誠委員長は4日の衆院本会議での代表質問で、国連平和維持活動(PKO)協力法で自衛隊を派遣しているカンボジアの情勢について、ボル・ポト派が武装解除を拒否していることなどを挙げ、『紛争当事国の停戦合意は崩れ、自衛隊派遣の前提条件は失われた』とたたいた。宮沢首相は『散発的な事件は伝えられているが、停戦合意という前提条件を危うくするものはない』と、自衛隊派遣を見直す考えのないことを強調した」(11月5日付朝日)

おそらく宮沢首相にとっては、政府軍とボル・ポト派の軍隊が、「散発的」でない「本格的」な戦闘を始めなければ、「停戦合意という前提条件」は「危うく」ならないということなのでしょう。

もし両者が本格的な戦闘を再開するようになったときには、当然自衛隊も巻き込まれてしまうでしょう。その段階で、果たして自衛隊が撤退できるでしょうか？

「ニュース」3号に書かれていたように、1937年の上海事変では、孤立した海軍特別陸戦隊を救うために陸軍の大兵力をおくり、結局中国との全面戦争に突入してしまっただけです。施設部隊である現在のカンボジア派遣自衛隊が危機に陥ったとき、それを引き揚げさせるのではなく、野戦部隊を増派しようという意向が強力に出てくることは、容易に予想できます。

そうなってからではおそいのです。カンボジアの自衛隊を引き揚げるのは、今をおいてありません。しかし、日本は今、愚にもつかない、まあ面白いけど、竹下派の内紛や、佐川問題でうろたえているばかりです。

たとえさきやかであっても、私たち「平和問題ネットワーク」から声を挙げようではありませんか。

(17号より)

ブノンベン政権とボル・ポト派

ボル・ポト派は、今やカンボジア国内のみならず、世界中から悪者扱いされています。政権をとっていた当時の大虐殺のことを考えれば、無理もないというところでは。その上、1年前のパリ和平協定に調印したにもかかわらず、武装放棄を拒否し、ブノンベン政権に対して武力攻勢に出ています。日本とタイの説得にも応じず、再三にわたる明石UNTAAC代表の呼びかけにも、まったくこたえようとしていません。こうして、カンボジアでは今、「悪玉：ボル・ポト派」対「善玉：ブノンベン政権」という図式が出来上がりつつあり、国連は当然善玉：ブノンベン政権の後押しをしようとしています。

ところが、このブノンベン政権なるものが、はたしてまっとうな「善玉」なのでしょう。ごく最近の新聞を読んだだけでも、疑いがいっぱい出てきます。

たとえば、11月10日付の朝日新聞の社説「綱渡りのカンボジア和平」のなかから引用してみましょう。「ブノンベンではいま、二万人を超すUNTAAC要員の流入と、ブノンベン政府の放漫な経済運営で、すさまじいインフレが進行している。政府高官の腐敗や貧富の格差の拡大、治安の悪化も目立ち、UNTAACと政府への一般市民や農民の反発が高まっているともいう。こうした状況こそ、ポト派の野望を力づけるものだろう」

同じ日の、やはり朝日に、「ブノンベン政府財政赤字深刻化・国際的な金融支援要請」という記事があり、そのなかで、政府の歳出予算2580億リエルに対して、歳入見込みはわずか6割の1487億リエルしかないと書かれていました。まさに破産状態です。また、物価上昇は、8月15%、9月23%で、今年1月から8か月間で184%に達したとあります。私たち年配の世代は、戦後のインフレを経験しているので、それがいかに恐ろしいものであるかを身にしみて知っています。

財政破綻とインフレは、庶民の生活を直撃します。その結果、ブノンベンでは、解雇された兵士が短銃を売り、強盗が頻発する(10月29日付朝日)、とばく場が流行る(11月11日付朝日)といったことが起こって、一部の成金は別として、庶民の苦勞はだんだんひどくなっているようです。

こんな記事もありました。「自衛隊 夜の窃盗団に泣く 燃料などごっそり たまらず監視塔設ける PKOタケオ基地」(11月6日北国夕刊) 戦争直後、アメリカ占領軍の豊富な物資は、食うものもろくなかった当時の日本人にとって、

まさにのどから手の出るようなあこがれの的だったことを、はからずも思い出してしまいました。

そして、11月12日の朝日新聞に、おどろくべき記事が出ていました。全文引用しておきます。

「ブノンベン政権が攻撃　UNTAAC明かす　停戦違反相次ぐ

【ブノンベン10日発＝真田正明】国連カンボジア暫定行政機構（UNTAAC）のボークスマンが十日明らかにしたところによると、カンボジア中部から西部にかけての地域で六、七月に停戦違反事件が4件連続して起こり、うち二件はブノンベン政権側から攻撃したことがわかったという。ボル・ポト派の「乾季攻勢」を非難してきたブノンベン政権が、先に攻撃を仕掛けたことは、事態を一層複雑にしそうだ。

七日に中部の村で起きた事件では、五人のボル・ポト派の兵士が殺され、二人のブノンベン政権側の兵士がけがをした。ブノンベン政権側は当初、ボル・ポト派とラナリット派の混成軍にしかけられたものだと、主張していたが、UNTAACはこれを覆した形だ」（11月12日付朝日新聞）

停戦監視違反は、ボル・ポト派だけではなかったのです。

三年まえの湾岸戦争でも、クエート善玉、イラク悪玉という図式がまかりとおり、世界の警察アメリカが善玉を助けて悪玉をやっつけました。しかし、真相が出てくるにつれて、そう簡単に善悪で割り切れないこともわかってきました。

いままた、カンボジアで同じようなことが起こりそうな気配です。そして、そのカンボジアにわが自衛隊がいるのです。このまま行くと、自衛隊もまた、内戦に巻き込まれてしまう恐れがあります。

日本が世界に誇るべき「平和憲法」は、どうなってしまうのでしょうか？

（理学部教官）

（30号より）

『ギブ・ミー・チョコレート』路線

— 国を守るとはどういうことだろう —

昭和20年8月、日本は降伏し、アメリカ占領軍がやってきた。

戦争中、アメリカでは日本人のことをイエロー・モンキーと呼んでいたそうだが、われわれは『鬼畜米英』と言っていた。その鬼畜がやってきたというので、頭に角でも生えているのかと見にいったら、ちょっと大きいだけで同じ人間であり、しか

もなかなか男前だった。その上、ジープの上からチョコレートやチュウインガムをくれた。このときのハーシーのチョコレートの味は、50年近く経ったいまも、まだ忘れられない。戦時中の数年間、チョコレートなどまったく食べさせてもらえなかったからである。

味を占めたわれわれは、たちまち『ギブ・ミー・チョコレート』という英語を覚えて、アメリカ軍を見ると集団で襲った。もっとも私は、中学2年生の誇り高い軍国少年だったから、そんなはしたない真似はしなかったが。とはいえ、友達がせしめてきたのをもらって食べたのだから、罪がないとはいえない。

逆に、アメリカ軍の兵士の立場で考えてみよう。彼らはそれまでの戦闘で、日本軍兵士の勇猛さ、あるいは、負けるとわかっていても降伏せずに最後まで突入してくる無謀さを、いやというほど知っていたはずである。そんな日本人が1億人もいる日本へ、たかだか数万の兵力で上陸してきたのである。無気味で、怖くて、びくびくしていたにちがいない。

ところが、上陸してみると、子供たちが群がってきて、『ギブ・ミー・チョコレート』と言って手を出す。チョコレートをやると、ニコニコ笑って『サンキュー』という。彼らは心のそこからほっとして、日本人に親しみを感じたに違いない。アメリカ軍兵士と日本人の間に、不幸な事件はいくつかあったようだが、組織的な集団虐殺といったことはまったく起こらなかった。『ギブ・ミー・チョコレート』路線の勝利である。

もともと、国を守るということは、そこにすむ人々の生命と財産を守ることだろう。当時の日本人の大半は、空襲で焼け出されていて、守るべき財産がなかった。だから、自分の生命だけを守れば良かった。憲法第9条の『戦争の放棄』『戦力不保持』『交戦権の否認』が簡単に成立し、受け入れられた理由である。

今は、日本人の多くが、守るべき財産を持っている。だから、それを守るために、軍隊が必要だという話になる。敗戦直後、新憲法がつくられたときと事情が全く違って来たという意見は、われわれに守るべき財産ができたという点にあるのかも知れない。つまり、軍隊というものは、財産を守るためにあるのだろう。

だが、それでは軍隊は、「われわれの」財産を本当に守ってくれるのだろうか。

戦争末期、日本陸軍は10万余の軍隊を沖縄に配置した。その軍隊が何をしたか。まず、上陸してきたアメリカ軍に負け続けた。装備も補給もまったく違うのだから、負けて当たり前である。ただ、当たり前でなかったのは、沖縄の住民がアメリカ軍に降伏することを許さなかった点である。住民にも最後まで軍に協力して戦うことを強制し、あの「ひめゆり部隊」や「健児部隊」をはじめとして、数万の住民の生命を奪ってしまった。

もし沖縄に日本軍がいなかったらどうなっていたか。アメリカ軍は平和的に進駐し、沖縄の子供たちは、われわれがやったように、「ギブ・ミー・チョコレート」で、殺されるどころかチョコレートが食べられただろう。

沖縄の日本軍は、沖縄の財産も守ることができなかった。それならば、彼らは何のために、沖縄で戦ったのだろうか。

日本軍が戦い、敗北して多くの犠牲者を出したのは、沖縄だけではない。南の島々では、数多くの「玉砕」が起こった。サイパン島その他では、やはり住民が巻き添えになった。昭和19年ころになると、日本が勝つ見込みはまったくなくなり、その勝利を信じていたのは、狂信的な軍人と、誇り高き軍国少年くらいなものだっただろう。そのころに降伏していれば、沖縄の悲劇も、広島・長崎の壊滅もなかったはずである。

日本の降伏が遅れた理由は、ただひとつ、「国体の護持」であった。国体といっても、国民体育大会のことではない。天皇を頂点とする国家体制、天皇制が「国体」である。日本が降伏しても、アメリカを初めとする敵側諸国が、天皇制を残してくれるかどうか。この一点をたしかめている間に、降伏はおくれにおくってしまったのであった。

この事実は、軍隊が守ってくれる「財産」が、われわれ庶民一人ひとりの財産ではなく、天皇を頂点とする日本の支配者の「財産」であることを、明確に教えてくれる。今の自衛隊も、大企業の財産は守るが、庶民ひとりひとりの財産など、守ってくれるはずはない。それどころか、うっかり反抗すれば鎮圧される。「社会秩序の維持」つまり内乱鎮圧は、自衛隊の職務に明記されている。

いまわれわれは、自動車や電気冷蔵庫やクーラーや電気ゴマすり機など、たくさんの財産を持って、ゆたかに暮らしている。だけど、それらの「財産」なるものは、自分の命をかけてまで守るに値するものだろうか。あるいは、人を殺してまで守らねばならないものだろうか。

日本には軍隊は要らないと、私は本気で思っている。いざというときには、『ギブ・ミー・チョコレート』路線でいけばよいのである。相手がチョコレートを持っていなかったら、ちょっと困るが。
(理学部教官)

「ネットワーク」では、昨年12月20日と今年5月16日の2回、金沢の繁華街香林坊で、市民にピラをまきました。いずれも12～3人の教官、それも結構な年寄りが多かったのですが、参加して、ほぼ30分で1000枚のピラを市民に手渡しました。以下に、そのピラの内容を紹介しておきます。

カンボジアに

内戦再発の危機がせまっています

市民の皆さん。

佐川急便事件の影にかくれて、新聞やテレビであまり取り上げられなくなりまじりましたが、カンボジアの情勢は、予断を許さない危機的な状況になりつつあります。

一年前のバリ和平会議で合意したはずの武装解除は、ホル・ポト派の拒否にあって進まなくなり、カンボジア各地で小規模ながら衝突と戦闘がくりかえされています。カンボジアで、公正な総選挙を実施し、平和と民主主義を確立するために乗り込んだ国連カンボジア暫定行政機構（UNTAC）は、ホル・ポト派の説得に失敗するや、これを力でおさえつけ、来年五月に予定されている総選挙を、なにがなんでも実現しようとあせっています。

もしそんなことになれば、わが自衛隊はどうなるのでしょうか？ 内戦にまきこまれ、被害が出ることになれば、施設部隊である現在の派遣自衛隊を守るために、今度は野戦部隊を増派しようという主張が出てくるのは、目に見えています。あの日中戦争も、在外邦人の保護の名目で軍隊を出し、さらにその軍隊が危険だということで、ぞくぞくと大軍をおくりこんで、侵略していったのです。日本国憲法第九条の一切の戦争放棄・戦力不保持・交戦権否認の規定は、その反省に立つものであることを、私たちは忘れてはならないと思います。

日本の自衛隊の海外派遣には、当事者の合意による停戦が大原則になっています。それは、「PKO法」にも明記されているのです。現在のカンボジア情勢は、この紛争四派の合意が完全に崩れています。自衛隊派遣の前提条件がなくなっているのです。今、カンボジアにいる自衛隊は、憲法はおろか、PKO法にも違反した存在です。

内戦が再発してからは、自衛隊を呼び返すチャンスはなくなります。

今すぐ カンボジアの自衛隊を

呼び返しましょう

一九九二年一月二〇日

金沢大学平和問題ネットワーク
(金沢大学教員有志)

カンボジア派遣P K O要員の危機に際し 宮沢内閣の責任を問う

いまカンボジアで、文民警察官が危機にひんしています。自衛隊施設大隊でさえ、攻撃されるかも知れません。特に、五月二三日に総選挙がはじまると、自衛隊は投票箱の輸送を担当することが決っており、そうなれば襲われる危険がきわめて高くなります。

彼らは、昨年六月、強行採決によって成立した「P K O法」によって派遣されました。国会の審議を通して、宮沢内閣は終始、「カンボジアはバリ和平協定によって内戦は終わっており危険はない、危険なところに自衛隊を行かせない、もし危険になれば日本の判断で撤収させる」と答えてきました。そのことを明記したのが「派遣五原則」と呼ばれているものです。

その五原則とは、次のとおりです。

- (1) 紛争各派の停戦合意
- (2) P K Oの受け入れ合意
- (3) 国連活動の中立性
- (4) この三条件の一つでも欠けると、日本政府の独自の判断で引き上げる
- (5) 武器の使用は身体の防衛に限る。

いまカンボジアでは、ボル・ポト派が総選挙の阻止をねらって攻撃を強め、フノンペン政権派も反撃するだけでなく攻勢に出ています。また、選挙をめぐる各派の間でもテロがくりかえされ、退職兵士の強盗事件もあとをたちません。バリ和平協定の「停戦合意」はすでに崩れたと見るべきでしょう。

にもかかわらず、宮沢内閣を代表する河野官房長官はこう言います。「停戦合意が崩れたとは思わない。それは、カンボジア全土で全面戦争が起こった時だ」この言葉を心から信用する人はまずいないでしょう。外務省のある幹部でさえ、「この言い方は、賢いというか、ずるい」「ボル・ポト派は一人しかおらず、それがゲリラ活動をやっているんだから、全面戦争になりようがない」と言っているのです（五月八日付：朝日新聞）。逆に、もし「全土で全面戦争」が起こったとしたらどうなるのでしょうか。その時点で自衛隊も文民警察官も、新たに派遣された選挙監視要員も、すべて戦争にまきこまれ、撤収どころの騒ぎではなくなります。宮沢内閣は、カンボジアで何事が起ころうとも、自衛隊等を引き揚げるつもりはないと明言しているのです。

政府は、憲法を拡大解釈して自衛隊をつくり、さらに拡大解釈してP K O法を成立させて自衛隊を海外に派遣しました。いま、自衛隊をカンボジアから撤収しないのは、違法の上に違法を重ねたそのP K O法にさえ違反しているのです。私たちは、「危険なところには行かせない。危険になれば日本の判断で撤収させる」と国会でくりかえし言明した、宮沢内閣の責任を問わなければなりません。

この期に及んでなぜ撤収を拒むのか。それは、国際的な非難を浴び、国際的に孤立するからだと言われています。たしかに欧米先進諸国からは非難されるでしょう。「日本は血を流さないのか」と。そうです。日本は自らの血も流しません、同時に、いかに身を守るためであっても、自衛隊の銃によってアジア人の血を流すことは、絶対にしたくないのです。そんなことをすれば、かつての大戦で日本軍にひどい目に合わされたアジアの民衆は、たとえ相手がボル・ボト派の兵士であっても、決して許してくれないでしょう。私たちはむしろ、アジアの民衆からの孤立を恐れるべきです。

宮沢内閣の中からも、「汗は流してもいいが、血を流してまで国際貢献をせよ」という議論はしていなかった。国際的批判を受けても自衛隊を撤収すべきだ」という小泉郵政相のような人も出てきました。

私たちも、欧米先進諸国の非難を恐れず、いますぐ、「カンボジアの自衛隊・文民警察官・選挙監視要員を呼び返そう」という声を上げようではありませんか。

カンボジアの自衛隊・文民警察官・選挙 監視要員をいますぐ呼び返そう

一九九三年五月一六日

金沢大学平和問題ネットワーク（金沢大学教員有志）

● 第6編集局長就任あいさつ

去年の秋、だしぬけに編集局長に任命されてしまいました。始めから数えて6人目だから、第6編集局長だと、会長はいうのです。でも、これだとなにか、編集局が6つもあって、その第6番目みたいで、あまり良い気持はしません。「編集局はひとつしかないのに、なんで第6なんですか」と聞いたら、「第1編集局長以来、卒業しても就職しても、編集局長をやめんのや。君もここで編集局長をやったら、一生その肩書が使えるで」と言われました。こんな肩書、一生使ってもあんまり役に立つとは思えませんが、仕方ないので、第6編集局長を名乗ることにしました。《これで、君の一生も終わりやで：第1～第5編集局長》

ちょうどそのころ、会長は、『日本生物学会誌』第31号の原稿を完成したころでした。この『生物学会誌』がどのような過程を経てつくられるのか、いい機会だから見学することにしました。本当は、手伝うと言ったのですが、「素人に手伝われると、ヒマがかかる上にロクなものができん。お前はそこで見ていろ」と会長が言って、見学になってしまったのです。会員のみなさんも、この会誌がどのようにしてつくられるのか、ご存じないと思いますので、報告しておきます。

原版の作成

会長の机の横に、スチール製の変な台がおいてあって、その上に古ぼけたワープロが載っています。何でも、昔は和文タイプライターで、集まってきた原稿や自分の原稿を、ポツンポツンと打っていたそうですが、今は、椅子を横に向けて、そのワープロを叩きます。生意気にも、ローマ字入力にして、キーを見ずに、両手で叩くのです。その速いこと、とても60過ぎたじいさんのやることとは思えません。

「ワープロ、叩き潰しそうですね」と言ったら、「機械というものは、叩き潰すまで使わなあかんのや」と言って、またピッチが上がりました。このワープロは、二台目の和文タイプライターを叩き潰したとき、一日、いや一時間でもタイプのない生活のできない会長が、その足で近くのダイエーへ行って買ってきたものです。なんでも、13万、14万の値段がついているワープロのなかで、ひとつだけ89800円というのがある、「なんで、これだけ安いんや」と聞いたら、「これは去年の型で売れ残りです」「新しいのとどこがちがうんか」「いえ、ほとんど使わないような装置がついてるだけで、中身は一緒ですよ」「じゃ、これにする」

とにかく、会長に買われた機械は気の毒です。

何やかや、44ページ分の原稿をつくると、今度はそれを印刷機にかけるために、2枚づつ張り合わせます。それがまたややこしい。まず表紙と裏表紙を一枚にして、順次張り合わせていくのですが、相当考えなければわからない組合せです。それを会長はこともなげに合せていきます。「まあ、30冊もつくっているんですから、

当然ですけどね」と言ったら、「これだけやないんやで。講義の図版やら原発反対のパンフやら、その数倍はつくってるで」

印刷

原版ができあがると、次は印刷です。「昨日、生協に紙を頼んどいたから、取りにいくの、手伝え」初めて手伝いの許可が下りました。会長の車に乗って、谷の向こうにある大学生協へ。一箱2500枚入りの再生紙6箱、計1万5千枚を車に積みこみながら、生協のおじさんがあきれたような顔して、「先生。こんなたくさん、どうしはるんですか」「おれは、昭和6年のヒツジ年やからなあ。紙さえ食わしてもらえばおとなしいんや」

部屋にかえると、どこからか調達してきた手押しの上に、5000枚の紙と、さっきつくった原版を載せて、理学部の事務室のとなりにある印刷室まで運びます。つくなり会長は、500枚入りの紙包をあけて、その半分を両手に取り、机の上ではたき始めました。会長の両手に取られた250枚の紙は、どういう仕掛けになっているのか、見事に一枚ずつずれ、それを机の上にすとんと落とすと、きれいにまた合わさります。「なんでそんなことするんですか」「紙を裁断機で切ると、端がくっついてしまって、印刷機の紙送りがうまいこといかんようになるんや。こうしてはたいておいたら、一枚ずつ送って、失敗がなくなる」

そこへ、事務の女の人がコピーをとりにやってきました。会長の紙はたきを見て感心し、「先生、道をあやまりましたね」「うん。おれもそう思っているんや」

会長がこんな技術を身につけたのは、学生のころに怖い先輩の共産党がいて、「おい。このピラ、明日の朝までに3000枚刷っておけ」と、どさんと紙と原版をおいていくのだそうです。ところが、そのころの紙は、仙花紙といって、紙と紙の間にほこりがいっぱいついていて、そのまま謄写版で刷ったら原紙がすぐつまって刷れなくなる。そこで、そのほこりをとらなきゃならない。両手で紙を少しずらせ、すとんと机の上に落とすと、紙の間のほこりが落ちる。それを数十回くりかえしてほこりをとってから印刷するのだそうです。「先生。大学でそんなことやってたんですか」「研究もしてたで」

紙をはたくと、次は印刷です。理学部には、リソグラフという便利な印刷機があって、1分間に100枚くらいのスピードで印刷していきます。手が汚れることもなく、失敗もほとんどない。「なんと、便利な機械ですね」「ひとつ気にいらんところがあるんや」「なんですか」「おれがやっても、Fさんがやっても、同じようにできるとこや」Fさんというのは、会長が奥さんの次に頭の上がらない人で、要するに、会長の印刷技術の腕の見せ所がないと言いたかったようです。

表紙をいれて12枚、350冊分、4200枚裏表をたちまちのうちに刷り上げて、また、部屋へもどります。

製本

金沢大学理学部が、金沢城から角間なる山奥へ引っ越したのにもなって、会長

の部屋、つまり日本生物学会本部も、新理学部の一室に引っ越しました。部屋は新しくなったのですが、なかに入っている机や椅子やソファや本棚は、みんな旧本部から持ってきた古いものばかりです。その中にただひとつ、スチールパイプの足に真っ白なデコラばりのしゃれたテーブルがあります。その上に、いま刷ってきた紙を順番に並べて置きます。そして、一枚づつ取って揃えていくのです。その手付きがまたなんともあざやかで、事務のおばさんが言ったように、たしかに会長は、職業を誤ったとつくづく思いながら見ていました。

ただ、ひとつ気になることを発見しました。それは、紙を一枚づつ取り上げるとき、人差指と中指の先を、舌でなめるのです。まあ、そうしないとすべて取りにくいことはたしかですが、結果として、生物学会誌のすべてのページに、会長の唾がつくことになります。先輩の編集局長から、生物学会誌を読んでいると精神がおかしくなると聞かされていましたが、なるほど、これが原因だと思いました。読もうと思ってページをめくると、ちょうどその部分に会長の唾がついているのです。指先から会長のウィルスが侵入してくるに違いありません。会員のみなさんにお勧めしますが、これから生物学会誌を読むときには、ピンセットを用意して、決して手でめくらないようにしてください。

一冊分12枚を重ね終わると、次はホッチキスで製本です。生物学会誌は中央で綴じますから、普通のホッチキスではできません。なんでも、特注してつくらせたという、長いアームの先についたホッチキスで綴じていきます。私も少しやらせてもらったのですが、12枚を一部の狂いもなくきれいに揃えるのが難しく、数冊やっただけでくびになりました。せっかく私が綴じたものを、全部またホッチキスをはがして、会長がやりなおすのです。

最後の仕上げは、二つ折りです。これがまた、簡単にはいきません。どうしてもちょっとずれるのです。「手伝わしたら、ヒマがかかってロクなものができん」という会長の言葉は本当でした。

送 送

製本がすむと発送です。生物学会も最近合理化が進んでいて、会員の宛名は全部フロッピーにはいっており、それを打ち出してハサミで切り、封筒の上に貼っていただくだけです。もっとも、一年に一度くらいしか出ませんから、その間に会員の異動があり、基本台帳のカードと照らし合わせる必要があります。これが結構ややこしい作業になります。

こうして、全部で250部くらいを封筒につめ、角間キャンパス内にある郵便局へ持っていきます。「170円が195個、350円が23個ですね。こちらでやっておきますから」「いや、切手貼って出したいので、切手下さい」「でも、こんな沢山大変ですよ。料金別納のスタンプのほうが楽ですよ」「いやね、これ一冊送るのに、こんだけお金かかっていることを見せつけてやりたいんでね」郵便局の人は呆れて切手を売ってくれました。それをまた、一枚づつ貼っていくのです。ふとみる

と、会長は切手を一枚づつなめて貼っています。みなさん、切手にも触らないようにしてください。

以上が、日本生物学会誌製作の一部始終です。結構大変な作業ですが、会長に言わせると、その前の原稿作成がいちばん大変なのだそうです。「去年の10月に31号を出してから、誰も何も書いてきよらん。みんなに書かそうと思って始めたんやから、なるべく原稿のくるの待ってたけど、こうなったらおれがみんな書くことにする」

この号はとうとう会長の独り舞台になってしまいました。

会員のみなさん、原稿をお願いします。

● 会長と第1編集局長の会話

1局長：会長。ひさしぶりです。

会 長：おう。だれかと思ったら、1局長やないか。何しに来た。

1局長：いえ、別に用事はないんですけど、ちょっと仕事で金沢へ来たもんですから。それに、新しい学会本部も見なかったし。

会 長：そうや。去年の夏にここへ引っ越してきたんやったな。

1局長：前の城内の生態1研と、なんか同じ感じですね、この部屋。

会 長：そうやろ。前の部屋にあった机や椅子や本棚や、みんな持ってきたからなあ。新しいものは何にも増えてないよ。

1局長：なつかしいものばかりですね。これが例の、一度座ったら二度と立ちあがれないソファですね。

会 長：そうや。ドクターの院生に90キロもある大男がおってなあ。そいつが愛用しとったから、いよいよ深く沈みこむようになってなあ。座るんやったら用心せいよ。腰痛めるで。

1局長：怖いですね、相変わらずこの部屋は。それでも、このテーブル、見覚えないなあ。

会 長：これか。これはなあ、ある日、おれがここへきたら、いつのまにかはいていたテーブルや。夜の間、だれかが勝手に入れよったらしい。

1局長：そんなこと、ありますか。夜の間になくなったというんなら、よく聞きますけど。

会 長：とにかくここは、狸や狐がいっぱいおる角間の山奥やからなあ。なにが起こるかわからんとこや。

1局長：それで、出処もわからんのに、いただいてしまったんですか。

会 長：いやな、これ、下品やろう。こっちの古いテーブルに比べたら。

1局長：こんなのを、下品っていうんですかね。こっちの汚いのが上品で？

会 長：上品と下品の区別くらい、すぐわからんとあかんぞ。それで、この下品な

テーブル、すぐ放り出してやろうとしたんやけど、ちょうどそのとき、「ネットワーク・ニュース」印刷したとこでなあ。このうえで折ったり揃えたりしてみたら、うまいこといくんや。それで、もらっとくことにした。

1 局長：相変わらず会長は、すぐころころ変わるんですね。

会 長：こんなとこで、節操なんか持ってたら、つとまらんで。引っ越しのときも、みんな先をあらそって、机や椅子や戸棚を新調してな。理学部の入口に大きな箱が山のように積んであって、その箱に、「プレジデント用椅子」と書いてあった。理学部には数十人、プレジデントがおるらしいよ。

(1 局長、吹き出す)

1 局長：それにしても、よく会長に部屋、あたりましたね。

会 長：実はな、引っ越しの一週間前まで、部屋があたるかどうか、わからなんだんやで。なんか、もう一人の助教授がみんな勝手にやってたらしい。

1 局長：そんなんで、会長は何も文句言わなんだんですか。

会 長：おれはもともと、引っ越し反対やったからなあ。引っ越し先の設計なんか口出したら、こけんにかかわるやないか。

1 局長：そんなこと言って、部屋あたらなかったらどうするつもりだったんですか。

会 長：そうになったら、荷物もってどこでも好きなおとこ、占領したらいいんや。おれだって、まだ、生態学講座の一頁やからなあ。しかもまだ現役助教授やぞ。

1 局長：怖いですね、それは。会長に実験室でも占領されたら、目も当てられない。

会 長：まあ、そのくらのことは敵もよく知ってるから、部屋の一つくらいあたるとは思ってたけどな。

1 局長：それにしても、引っ越し大変やったでしょう。

会 長：まあ、本を段ボールの箱につめるのはちょっと大変やったけど、引っ越しは運送会社がやってくれたから、すぐかたずいたよ。それよりも、来てからが大変やった。

1 局長：どうしたんですか。

会 長：建物がまだ完成してへんのや。

1 局長：完成する前に引っ越したんですか？

会 長：そうや。来てみたら、電話はついてないし、水は飲んだらいかんいうし、そこら中に工事の車が走りまわっとるし。7階建てやのに、手摺のないとこがあって、学生が落ちそうやし。

1 局長：無茶ですね、それは。

会 長：大体、建物建てたら、完工検査いうものがあるや、それに合格せんと受けとらんというのが常識や。期日におくれたら、罰金とることになってる。どうも大学当局は、出来てないのにできたということにして、受け取って

しまいよったらしい。汚職の匂いがするなあ。

1 局長：どうしてそんなことになったんですか。ここは国立大学でしょう。

会 長：国立やからそうなるんや。角間移転の裏には森通産大臣がいるという話で、一説によると、この移転で森は、業者から40億円もらったとかもらわんとか。とにかく、ひどい移転やったなあ。

1 局長：僕は、金沢大学がお城のなかにあるから受験したんですよ。こんなところにあるんなら、まあ、受けなかったでしょうね。

会 長：そんな受験生がこれから増えてくるやろなあ。まあおれは、偏差値の低い学生のほうが好きやから、それでもええんやけど、今頃になってあわててる先生もいるらしいで。なんか、受験生対策の委員会ができて、カラフルなパンフをつくるらしい。

1 局長：どうしてこんなことになってしまったんですかねえ。

会 長：みんな金に目がくらんだからや。数学のある先生が、五十万円の椅子を注文したとかね。

1 局長：五十万円の椅子！？ そんなもん、あるんですか。

会 長：コクヨのカタログで調べてみたら、それがああるんやなあ。

1 局長：その椅子に座ったら、何かいいアイデアでも浮かぶんですかね。

会 長：気持ちよすぎて、出そうなアイデアも沈むんじゃないかね。

1 局長：この、「一度座ったら最後、二度と立ち上がれん椅子」のほうが、ずっといいですね。

会 長：そうや。もっとも、これに座っても、眠くなるだけで、いいアイデアが出てくるとは限らんがね。

● 「会長」公墓、その後

つれづれなるままに、「日本生物学会誌」第30号を読んでいたら、おもしろい記事を見つけました。「日本生物学会会長公募」です。私は知らなかったのですが、会長は辞意を表明しているのですね。日付は1991年12月1日ですから、私が会員になったのは、会長の辞意表明のあとです。それならそうと、会員になる前に言ってくれたらよかったのに。

それに、その記事のあとの、「会長と編集局長補佐の会話」の中に、「教養部のH先生」という方が出てきて、次期会長公募の話聞いて、「そらむりや。日本生物学会の会長と皇太子の嫁さんは、聞いただけでみんな、くもの子を散らすように逃げていくからな」などと言っています。でも、皇太子の嫁さんは決まりました。会長公募してからもう1年半も経っていますし、この件はいったい、どうなっているのか、会長にただしました。

6 局長：会長。次期会長はまだ決まらないんですか。もう1年半になりますよ。

会 長：もうそんなになるか。一向にだれも応募してこんのや。先着順やから、応募したとだんに会長になれるのにな。

6 局長：皇太子の嫁さんも決まったんですから、そろそろ次期会長も決めなくちゃ。

会 長：そやな。世の中、不可能ということはないからな。そや。君、会長になれ。

6 局長：えっ！？ 僕が・・・。

会 長：そや。

6 局長：そんな無茶な。僕はまだはいったばかりですよ。

会 長：はいったばかりでもう編集局長になっとるやないか。ついでに会長に出せしろよ。

6 局長：生物学会の会長になったら、出世なんですか。

会 長：学会の会長なんて、滅多になれるもんやないで。それに、ほかの学会は、民主的やとかいうて、運営委員会や総会なんかがうるさいこと言ってきて、会長といえども自由に何でもやれるわけやない。その点、我が日本生物学会は、会則で、会長の独裁をうたってるから、何でも思いのままやで。

6 局長：会長の話聞いてると、なにかとてもいいように思いますけど、それにしては何で誰もなりたがらないんでしょうね。

会 長：それが不思議なんやな。うちの会員はみんな出世意欲がないんやろ。

6 局長：でも、学会が赤字やいうたら、あっというまに12万円も会費が集まったところをみると、会員はみんな学会をつづけてほしいのと違いますか。

会 長：あれはな。会費払わん奴の中から、次期会長を抽選で選ぶと脅迫したからやろ。

6 局長：会長職というのは、脅迫にも使えるんですか。すごい学会ですね。僕、怖くなってきた。

会 長：いまから止めようと思っても、もうおそいで。いったんはいったら止めさせてもらえんのがこの学会や。

6 局長：どうしたら止めさせてもらえるんですか。

会 長：そやな。カンボジアへボランティアで行って、射ち殺されるとかな。

6 局長：・・・。

会 計 報 告
1992年4月 ～1993年3月

収 入		
1000円会員	34人	3400円
1000円会員	102人	102000円
2000円会員	22人	44000円
寄 付	2件	1740円
計		150740円
前年度繰り越し		-116960円
実 収		33780円
支 出		
再生紙	4200枚×1.6円	6720円
表 紙	350枚×3円	1050円
封 筒	250枚×3円	750円
送 料	31号その他	25000円
計		33520円
差し引き残高		260円

【監査報告】

会計監査：去年12万円も赤字出して、今年は黒字260円とは、神業ですな。

会 長：まあ、何でも何とかなるということや。

会計監査：去年まで計上してた、ファクス原紙や印刷インキ代がなくなったんは、どういうわけでんねん。

会 長：内緒の話ですけどな。理学部の印刷機、つこうてますのや。文部省持ちでんな。誰にも言うたらあきまへんで。

今年も会費を集めることを条件にして、合格と認める。

日本生物学会 会計監査 夢籍 忍次郎 印

日本生物学会誌 第32号
編集・発行 日本生物学会
金沢市角間町
金沢大学理学部生物学教室
223号室
編集無責任者 奥野良之助
振替 金沢 40763 日本生物学会
許可無断転載